

アメリカ反帝国主義運動試論

——その諸グループと帝国主義理解を中心に——

横 山 良

【要約】 本稿は、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて展開されたアメリカ反帝国主義運動を一つの社会運動として跡づけ、その新たな実態把握と性格規定を試みんとするものである。そのための方法として、第一に、考察対象を反帝国主義連盟の運動に限定することなく、その周辺で展開された様々な大衆的運動をも視野に入れ、第二に、それぞれの帝国主義理解をメルクマールとして、反帝国主義運動内における諸グループを分別し、第三に、その内容による運動の時期区分を行った。その結果、反帝国主義運動内には、帝国主義と独占の結合を感知している有力な部分が存在してはいたものの、総体として、その関心方向はきわめて「内向的」(あるいは内政優先)であり、革新主義へと合流する論理的必然性を有していたと結論づけた。

史林 五七卷三号 一九七四年五月

序

本稿は、一九世紀末から二〇世紀初頭に展開されたいわゆるアメリカ反帝国主義運動をいわば一つの社会運動として再構成せんとする試論である。

従来、反帝国主義運動については、主にニュー・レフト系史家によって、運動そのものに深く内在し、その実態を把握することなく、それは本来外交政策に第一義的に関った運動であるとの前提のもとに、きわめて粗雑な性格規定や意義(あるいは機能)賦与がなされてきた。^①一つの運動を考察する道順としては、正確で全体的な実態把握とそれに基いた性格

規定をまず前提とし、そののち、これを十分にふまえたうえで、この運動の四囲の客観的諸条件との関連の中でその意義判断を行うべきである。このことが十分認識されていないため、実態分析において深い成果をあげた研究者すら、その意義判断において、短絡の陥穽に嵌っているとも言えよう。^② このことの反省のうえに立つて、本稿では、反帝國主義運動そのものに内在し、今一度その実態を把握し、その性格規定を試みる。

さて、反帝國主義運動の実態把握と性格規定にさいし、従来、この運動の構成層の多様性、運動態の不定形性に規定されて、方法的に様々の混乱があった。代表的なものの一つは、反帝國主義運動と反帝國主義連盟の活動とを全く同一視するものであり、今一つは、反帝國主義運動のいわば頂点イデオログの分析をもって運動分析に代えるものである。^③ この点に關し、本稿では、第一に、運動を反帝國主義連盟のそれのみ限定せず、その周囲で展開された大衆的運動をも視野に入れ、また運動が働きかける相手、いわば客体として政治勢力ブライアン派を位置づけることによって、第二に、それぞれの帝國主義理解をメルクマールとする反帝國主義運動内の諸グループの分別によって、第三に、運動内容の時期区分を行うことによつて、一応の素描的整理を試みた。諸グループのなかでも、とりわけブラッドフォード・マックネイル派(あるいはポストン改革者グループ多数派)に注目し、これと他グループとの競合、交錯の過程を辿る中で、反帝國主義運動の新たな相の発見に努めた。^④ それとともに、本稿は、アメリカのいわゆるプチ・ブル的運動なるものの分析への一つの試行をも意図している。

- ① William A. Williams, *The Tragedy of American Diplomacy*, (1959), John W. Rollins, "The Anti-Imperialists and Twentieth Century American Foreign Policy," *Studies on the Left*, vol III, No. 1, (1962), William J. Pomeroy, *American Neo-Colonialism, Its Emergence in the Philippines and Asia*, (1970), 43-50.
- ② E. Berkeley Tompkins, *Anti-Imperialism in the United States* : *the Great Debate, 1890-1920*, (1970). ※本稿が多くの負の面を Daniel B. Schirmer, *Republic or Empire, American Resistance to the Philippine War*, (1972), 4-11 の題名を有する。
- ③ 前掲の書(註)に Fred H. Harrington, "The Anti-Imperialist Movement in the United States" *Mississippi Valley Historical Review*, vol. 22, (1935), 巻末のヤネに Robert L. Beisner,

Twelve Against Empire: The Anti-Imperialists 1898-1900, (1968).

④ 本稿における用語法について。「帝国主義」という言葉は、当時の人々のこめた意味あいにおいて使用した。その意味が何であるかは行論のうちに明らかにされよう。従って「反帝国主義」についても同様である。また、「反帝国主義者」とは、反帝国主義連盟の会員に限らず、そのような主張をもった人すべてを含む。「反帝国主義運動」と

は、反帝国主義連盟の運動に限らず、その周辺の運動をも含む。ただしライアンは、一応反帝国主義連盟の会員であったが、独自の政治勢力の具現者であることを考慮して、構成の必要上、本稿では、「反帝国主義者」に含めず、「反帝国主義運動」とは独立の人物と指定した。なお本稿において、「反帝国主義運動」は反帝運動、反帝国主義連盟は反帝連盟などと略記する。

I 併合拒否の局面（一八九八年六月—一八九九年二月）

1 ファナル・ホール会議

アメリカが米西戦争に突入し、キューバ及びフィリピンで戦線をしき、連邦議会では、長年の懸案であるハワイ併合条約がまさに成立しようとしていた一八九八年六月一日、プリマス植民地初代総督の末裔であり、老政治評論家のガマリエル・ブラッドフォードの呼びかけで、ボストン市の由緒あるファナル・ホールにおいて、「いわゆる帝国主義政策がアメリカによって採用されることに抗議するための」会合が持たれた。新聞の報ずるところによれば、出席者は二百〜四百人で、「当市の改革者を代表し、どちらをむいても、良き大義の指導者のよく知られた顔がみられた」という。ブラッドフォードの他、ボストンの著名な弁護士で、「マサチューセツ改革クラブ」会長のモアフィールド・ストーリーレイ、ドッチェスターのユニテリアン派の牧師チャールズ・エイムズ、ボストンの労働運動指導者のジョージ・マックネイルなどが演壇に上り、挨拶を送った。出席者の中には、アービング・ウィンスロー、フランシス・オズボーン、アルバート・パーソンズ、エドワード・アトキンソン、デイヴィッド・ハスキンス等が含まれていた。これらの人々のほとんどは、おおむねニューイングランドの旧エリート層に属し、従来より何らかの改革運動に関り、また、この後は「反帝国主義連盟」の中軸的役員を務めることになる。我々は以下、これらの人々並びに、その後設立される「反帝国主義連盟」の役員など

(副会長を除く)をボストン改革者グループと呼ぼう。^①

さて、この会合での三つの主要な発言を紹介し、初発における反帝國運動の帝國主義理解を検討してみよう。

先ず、呼びかけ人であるブラッドフォードは、冒頭の挨拶において、アメリカ人民と連邦議会の精力は、地球の向う側の何百万の東洋人を統治する重荷を担うためではなく、合衆国の政治、社会状況の改良のために必要である、としたのち、「戦争の唯一の動機が人道にあったことは疑いえない。わが人民に多大の榮譽を与えるこの貴い資質が他の目的のためにもあそばされたのだ。利得を追求する私的利益や、権力を保持すべく懸命の政治家、陸軍や海軍の隆盛を渴望する空想などが大きく関わっている。そして、同じ勢力はアジアにおける……軍事帝國の確立へと我々を促進している」と述べた。^②

また、マックネイルは、民族、歴史、伝統、文明における相違のために、フィリピン人は、合衆国に州として編入されないものであるから、併合には反対である、しかし、それを植民地にすることはアメリカ民主主義の原則にもとり、考えられぬ、アメリカは中国人移民の禁止にすら手こずっており、労働競争のもめごととはもうたくさんである旨を述べたが、彼の発言で注目すべきは、いわゆる帝國主義の根源について言及している点である。彼は言った。「併合は、今日、企業をむさぼり喰いつつある投機的産業怪物の強化を意味している」と。^③

さらに、ストレーイは、「……人道の大義において開始された戦争は、帝國のための戦争へと歪曲されてはならぬ。……スペイン植民地を奪取し、それを、その地の人民の同意なく、自らのものとして保持することは、わが統治が立脚している……諸原則を侵犯するものである。……しかし、問題はそれにとどまるものではない。……我々は常備陸軍と巨大な海軍という重荷を担わされ、何千マイルも彼方の紛糾に脅かされ、絶えざる不安にさらされる軍事強國となるのだ。……我々の注意が分断されるため、国内の諸困難は無視されるであろう。租税は増加され、通貨は一層無秩序になるにちががなく、最も悪いことは、我々を脅かしている腐敗が必ずや拡張することである。」と。^④

さて、彼等三人が帝国主義を現象としては、海外領土の武力による併合、とりわけフィリピンのそれであると考えていたことは疑いない。

問題にさるべきは、何故、そのような帝国主義は悪であり、従って被害者はだれであり、その根源は何であるかをいかに捉えていたか、いわば、帝国主義の本質認識である。ブラッドフォードは、根源を私的利益、政治家、陸海軍拡張論者に帰している。しかし、何故悪であるのか、即ち、被害者については引用した発言においては分明でないが、国内政治優先とアメリカ人民の人道主義への侮辱がいわれているところから推察すれば、アメリカあるいはアメリカ人民ということになるのか。マックネイルは根源を投機的産業怪物としているが、如上の発言では被害者については労働競争を示唆しているところを見ると、労働者らしい。また、ストレーイは、根源については全くふれていない。以後の脈絡との関りでの点は特に留意すべきである。一方、帝国主義の悪は「我々」が重荷を担わされ、国内問題が等閑視されることであり、従って、被害者については、「重荷を担わされ……、脅かされ、……不安にさいなまれる」「我々」である。この「我々」の内容が不明瞭であることも言うまでもない。

断片的発言からではあるが、我々はここで、初発時において、反帝国主義者の中には、いわゆる帝国主義の現象を海外領土（とりわけフィピン）の武力併合であるとする点では一致があったものの、帝国主義の根源とその被害者の認識においては、マックネイルやブラッドフォードのように根源と被害者をおぼろげながらも感知している部分（以後ブラッドフォード・マックネイル派とも呼ぶ）と、ストレーイのように、根源の問題を全く意識にのぼらせていないが、少くとも「我々」が被害を受けている、即ち、被害者は国内に存すると感じていた部分とを識別しよう。

さて、この会議において採択された決議は以下のようなものであった。

決議

一、キューバにおける不幸な状況を「終結させることによって人道への責務を果さんとする私心なき努力」として開始された戦争は

征服の戦争へと歪曲されてはならぬ。

一、この戦争の結果として領土を併合することは、合衆国は、「その平定のため以外は」キューバに対して、「主権を行使したり支配したりするいかなる用意も意図」も否定する、と明言した連邦議会の合同決議——即ち、この国は戦争を行うについて、いかなる利己的目的も持たぬという意味をもたされ、精神においては、あらゆるスペインの領有地に適用される放棄宣言——の中で誓約された国家の信条を侵犯することになるであろう。

一、我々の第一の義務は、我が国の病弊を治癒することである。即ち、ニューヨークやフィラデルフィアがその極めて顕著な例を呈している腐敗した政府、労使間の紛糾した関係、無秩序な通貨〔制度〕、不公正な租税制度、選挙や立法府での金力の墮落的影響、利権としての官職の利用、等々^⑤……

この決議の意味内容を検討してみよう。

まず、テラー修正を拡大解釈して、その他のスペイン領植民地にも適用することによって、それら（とりわけフィリピンの）武力併合を否定している。なお、ここでは、フィリピン等スペイン領植民地への処置については全く言及されていないが、それは当然である。彼等の立場はフィリピン併合の拒否——いわば、「つき放し」——であって、それらへの処置について考慮する必要を感じなかったのである。

ついで、内政改革優先の姿勢が極めて明瞭に述べられている。これは、その後も反帝運動を貫く基本的発想であると思われるが故にとりわけ銘記する必要があるであろう。

帝國主義の現象認識については直接述べられていないものの、海外領土の武力併合であることは容易に推察しうる。また、帝國主義の本質認識については、その根源についての認識は全く欠落している。被害者についても触れられていないが、内政優先が直言されているところから判断すれば、アメリカ国民ということになるか。結局、決議はストーレーの認識に最も近似した内容でまとめられたといつてよかろう。

さて、以上、ファナル・ホールでの発言や決議を通じて、初発における反帝運動の帝国主義認識を模索したが、以下、この会議を構成した層(グループ)の問題に触れたい。この点に関して注目すべきことは、ボストン改革者の典型とされるブラッドフォードとボストンの有力労組指導者マックネイルが同席し、同じ演壇から語ったことである。マックネイルの出席は個人的なものと考えるべきではない。彼の背後にはボストン市労働者の支持が控えていた。そのことは、このファナル・ホールでの会議の準備において、彼並びに、彼と並ぶボストン市労働運動指導者のヘンリー・ロイドが尽力したと、また、この会議の数日後、「ボストン中央労働組合」が「帝国主義的政策」と、ハワイ、プエルト・リコ、フィリピン諸島の併合に反対する決議をあげていることなどによって証明されている。^⑥

従って、ブラッドフォードとマックネイルの同席は、ボストン改革者と労働者との間の共闘を象徴していたといえよう。実は、この両者は、これ以前より共闘の経験をもっていた。つまり、ブラッドフォードは、一八九六年、ヘンリー・C・ロッジらが州議会を隔年開会にせんと画策した時、マックネイルその他の労組指導者と共闘して、それを阻止したのであった。この経験がそのままファナル・ホール会議に持ちこまれたとみてよからう。^⑦

ブラッドフォードとマックネイルの共闘は、決して偶然的なものではなかった。我々はすでに、二人が、帝国主義の本質認識では、近似性を有していたことをみた。しかも、実は、ブラッドフォードは帝国主義の根源に関する認識ではマックネイルのそれに近づきつつあった。彼は、たしかに、元銀行家であり、上層市民層に属してはいたが、独占の根源的脅威をすでに認識しつづつあった。彼は一八九九年出版の自著の中でこう述べている。「全国に興起した大トラストと独占は、連邦議会にその意志を貫徹させるには十分な金力を結集しさえすればよいのだということを一層学びつつある」と。^⑧この独占認識が、その帝国主義理解の中核にすえられた時、ブラッドフォードの帝国主義理解はマックネイルのそれに完全に一致するのである。いづれにせよ、両者の共闘は、その帝国主義理解の近似性に基礎づけられていたといえよう。

さて、ファナル・ホールでの会議は、運動の普及、拡大のために、ブラッドフォード、ハスキングズ、ウインスロー、パ

ーソンズから成る「通信委員会」を任命した。同委員会は帝國主義に反対するあらゆる階層の國民を広範に結集することを組織方針としていた。この方針は後に結成される「反帝國主義連盟」にも一貫して受け継がれて行く。通信委員会は、九八年夏から秋にかけて、国内の著名人に接触し、帝國主義に反対し、協力してくれそうな各連邦議會議選挙区の有力者を探し、彼等に、帝國主義反対を訴える文書を送付し、帝國主義に反対する地方グループを結成するよう呼びかけた。又、同委員会は一方では、様々な政党・宗教・商業・労働・社会組織に接近した。委員会の委員は様々な雑誌に寄稿し、可能なところではどこでもそれを出版した。また、同委員会はマサチューセッツにおいては、「マサチューセッツ改革クラブ」との間に協力関係を結んだ。^⑨

2 「反帝國主義連盟」結成

一八九八年一月一八日より二〇日にかけて、反帝通信委員会の招請に応じて、マサチューセッツの著名人約五〇人が、ボストンのアトキンソンの事務所に集り、この場で、「反帝國主義連盟」が結成された。

この結成會議で選出された役員は以下の如くであった。

会長―ジョージ・バウトウェル(元州知事、元連邦議會議員、元閣僚)、書記―ウィンスロー、財務―オズボーン。實際活動の中枢である執行委員会は上の三人に加えて、ウィンスロー・ワレン(委員長)、ハスキンス、パーソンズ、ジェイムズ・P・ムンロー、ウィリアム・エンディコット、ジェイムズ・J・マイヤーズの九人で構成された。これらの人々はいずれもボストンあるいはその近辺に居住し、マサチューセッツの公的生活では積極的な人々であった。また、連盟は全國の著名人から成る、名譽職的副会長職を設定した。その顔ぶれば、大独占資本家アンドリュー・カーネギーからA・F・L・会長サミュエル・ゴンパーズまで、様々な傾向の改革者、政治家、知識人、労組指導者、農業利益代弁者、実業人などを含み、この運動の基盤の広範さと多様性を如実に物語っていた。^⑩

さて、反帝連盟設立大会で採択された憲章の中にはその目的と会員に関して次のように明記されていた。「目的…目的は、あらゆる合法的手段をもって、合衆国によるフィリピン諸島あるいは海外のいかなる植民地の獲得にも反対すること。会員…その党派のいかにかわりなく、いかなる合衆国市民も、連盟の目的に共感すれば会員になりうる。」^①（傍点筆者）

また以下のような「合衆国人民への訴え」を発し、その依って立つ原則を示した。

一、「自由人の真の共和国」はその正当な権力を被治者の同意から抽出しており、もしこの原則が放棄されるならば、共和国は名目的に存在するにすぎぬ。

二、合衆国憲法は従属民保持の規定をもたず、市民間の階層的区別を認めていない。

三、反帝国主義者は、「スペイン領諸島での自由を求める人民の英雄的闘いに共感を持ち、それ故に、支配者の置換によって彼等からその諸権利を奪うことに抗議する。」

四、究極的に州の資格を賦与することをはっきりと目的とし、購入によって獲得された人口稀薄の隣接地域への自然成長的膨脹は、戦争によって獲得され、弱体な敵から力によって奪取された海外領土と混同されたり、類比されたりしてはならぬ。

五、「新帝国主義は、力の法則をうち立て、商業的利得と誤った博愛を共和国がその基礎としてきた健全な諸原則より上位におくこと」を求めている。

六、スペインとの戦争は、征服のためではなく、「ただ人道と自由のためにのみ」戦われるべきであった。

七、帝国主義は、「国内における切迫した金融・労働・行政問題の解決を危うくし遅延させるであろう海外紛争を必ずや結果させるにちがいない。」^②

右の「訴え」について、まず留意しておくべき点は、やはり、ファナル・ホルの決議と同じく、フィリピンについての具体的措置が言明されていないことである。ここでもフィリピンへの「つき放し」の姿勢が読みとれる。

さて、「訴え」は従来より指摘されてきたように、きわめて抽象的な政治原則論、政治体制論、憲法論に立脚したものであるが、その中にひそむ帝國主義理解を抽出してみよう。帝國主義の現象形態が、戦争によって海外領土を奪取すること、憲章と照合すれば、具体的にはフィリピンを併合することとして捉えられていたことは明白である。次に、帝國主義の本質認識（根源と被害者）については、きわめて曖昧である。先ず根源については言及されていない。被害者についても明確でないが、国内の諸問題の解決への脅威をあげることから推断すれば、やはり、合衆国民ということになる。帝國主義の第一の被害者として、フィリピン人民をあげていないことは注目すべきである。これを、憲章が会員資格を合衆国民に限定していることとつきあわせるならば、反帝運動がこの時点においてむしろ、「アメリカのためのもの」と考えられていたことが浮き彫りにされよう。我々は、以後、このように帝國主義の本質を国内の視点を第一義として捉える傾向を帝國主義理解の「内向性」とよびたい。この帝國主義理解は、ファナル・ホルでの、ストーレイの言葉や決議のそのの域をでないものであり、ブラッドフォード・マックネイル的理解は下部に沈澱したままであったとみてよからう。

さて、設立された反帝連盟は、反帝通信委員会以来のプロパガンダをより精力的に展開した。とりわけ、それは、大統領と連邦議会へ向けての大衆抗議と大衆請願、反帝國主義的文書の発行・配布などに力点をおいていた。アトキンソンは、展開しつつある運動の広範さとテンポの早さについて友人にこう語っている。「ゴンパーズ、マックネイルその他の指導的労働改革者が我々と共にある。……指導的なアイルランド系人が手紙をよこした……グレンジャー達もハーバート・マリックの指導の下に我々と共にある。」「我々は……全国を組織すべく極めて速やかに前進しつつある」と。実際に、

反帝連盟の最初の会合において、すでに、ボストンと同様の組織化が進行しつつあったニューヨーク、フィラデルフィア、ボルティモア、シカゴとの連絡について報告がなされていたし、ボストンの組織についての新聞解説をみた多くの人が、支部連盟を結成するためのアドバイスを求めて全国から手紙をよせていた。^④

3 ブライアンの動向

一八九六年大統領選挙で、銀貨自由鑄造と反トラストを争点に掲げて戦ったブライアンは、米西戦争そのものは人道のための戦いとみなし、自ら兵役を志願し、ネブラスカ連隊を組織し待機していたが、帝国主義の問題については、早くも、ファナル・ホール会議の前日、一八九八年六月一四日、ネブラスカ州オマハにおいて行った演説の中で、要約すれば次のような見解を表明していた。

一、人道のための戦いは征服のための戦争へ墮してはならぬ。二、統治はその正当な権力を被治者の同意から抽出している。三、合衆国の人種的同質性の保持等々。^⑤

その多くの部分がファナル・ホールで確認された原則と一致するため、このブライアンの発言は、ボストンの反帝国主義者に好感をもって迎えられ、彼等の中には、早くもブライアンとの連合に期待をかけるものも現われた。例えば、反帝運動の機関紙的存在であった「ボストン・イブニング・トランスクリプト」紙は、一八九六年にはブライアンに反対したのだが、この演説のあとでは、ブライアンは「偉大な中西部」と「東端部」を、「アメリカ帝国主義への迎え火を放つこと」において統一させたとして、これを大いに賞揚した。また、ブラッドフォードは、「マサチューセッツの……民主党員への訴え」において、ブライアンやクリーブランドの例を引きつつ、民主党は、これらの（帝国主義に伴う）諸悪から逃れるための「唯一の希望」であるとし、「我々は、互いの相違を不問に付し、……崇高な大義にかける努力を統一しえぬのか」と、通貨問題を棚上げにして、反帝国主義において統一することを訴えた。彼はすでに、民主党との連合を明

確に志向していたのである。¹⁶⁾

ブラッドフォードの願いは、早くも、一八九八年秋のマサチューセッツでの中間選挙において部分的に実現された。つまり、州民主党大会は、「帝國主義への妥協なき反対」を決議し、「反帝國主義の立場に立つ「ボストン中央労働組合」のヘンリー・ロイドを州官房長官候補に指名した。彼は、フィリピン併合反対と植民地の安価な労働力がマサチューセッツ労働者にもたらす脅威について精力的に説いた。¹⁷⁾

ところが、一八九八年一月一三日、ジョージア州サバンナでのインタビュにおいて、除隊直後のブライアンは以下のように語った。やや長くなるが引用してみよう。

「……我々の反対者は、帝國主義と膨脹とを区別すべきである。彼等はまた西半球における膨脹と、我々をヨーロッパや東洋における係争にひきこむ膨脹とを区別すべきである。さらに、彼等は、将来の定住のために隣接領土を獲得する膨脹と、将来の服従のために異民族を獲得する膨脹とを区別せねばならぬ。……条約の批准に対しては戦うべきだと考えている人々もいる。しかし、私は、むしろ他の方針を採る。もし、条約が否決されたならば、交渉が新たになされねばならず、我々は自らの考えに従って問題を解決するのではなく、外交によってそれを解決せねばならぬ……。私は思うのだが、条約を批准することによって、直ちに、戦争を終結させ、それから、問題を我々自身のやり方で扱う方が容易であろう。……大統領は、その教書において、キューバを占領するについての我々の唯一の目的は安定した統治を確立し、それから、それをキューバ人民に移管することであると言っている。連邦議会は、キューバについては、この目的を再確認し、フィリピンとポート・リコについても同じ目的を主張できる。……我々は与える奉仕の代償として、ポート・リコとフィリピンに港湾と船炭所を保持すべきである。我々がキューバに対しても同様の租借を求めたとしても、それは正当というものだ。

人々がまだ独立した統治への願望を何も表明していないポート・リコの場合については、我々は、もし、その市民が併合を望むな

らば、併合の意志を表明しても正当というものであろう。しかし、「フィリピンの」人々がそれを望んだとしても、フィリピンは余りにも遠隔であり、人々は我々とは余りにも異っており、併合されえない。」^⑧

以上の引用から明らかなように、ブライアンははっきりと条約の批准を支持したのであった。彼が抱いていたフィリピンへの措置についての方針は、まず条約を批准し、そののち、合衆国の目的は、フィリピンに安定した統治を確立したのち、独立を与え、撤退することである、という言明を連邦議会が行うというものであった。

さて、次に、サバンナ・インタビューを中心に、それに、この後、一八九九年二月六日の条約批准までにブライアンが帝国主義の問題について行った発言を補いつつ、彼の帝国主義理解を検討してみよう。

まず、帝国主義の現象形態を彼はどのように捉えていたのか。一八九九年一月九日の「ニューヨーク・ジャーナル」紙への一文の中で彼は、「海外領土に対する」保護の下で可能な貿易関係は、力による併合の結果もたらされるそれよりも、合衆国にとって価値あるものであろう」とのべ、また一月一五日同紙に、「彼等〔帝国主義者〕は、貿易が国旗〔主権のこと〕のあとに従う。より広い市場こそが併合の結果であらうと語る。……しかし、通商はコストの問題であり、旗の類の問題ではないと答えてよからう。……併合はアメリカ資本の投資のための新分野を与えるであらうと論じられている。もし、投資のための余剰資金があれば、なぜ、農地の購入、国内事業開発、外国資本の代替に使用されないのか……」と論じた。^⑨

ブライアンが、帝国主義の現象形態を、西半球以外における海外領土の政治的支配であると捉えていたことは明白である。これら海外領土において租借された港湾や給炭所を利用しての、あるいは保護下での貿易の膨脹自体は肯定されている。政治的支配を伴わぬ投資については肯定されそうにみえるが、資本そのものが公共的有用性をもつものと誤解されているため否定され、むしろその国内転用が訴えられている。

さて次にブライアンの帝國主義本質理解についてみてみよう。この点については、一八九八年二月三十一日、出身地ネブラスカ州リンカーンでの演説で、「帝國主義はその発源を義務ではなくドルに持つものである。若干の投機家に搾取の機会を与えるために、増大した税をわが人民に担わせることは我々の責務ではない」、と端的に、根源「ドル」投機家と捉え、被害者「国内人民」と措定している。この定式化は、その他の発言によって一層明瞭化する。

「力による併合は『犯罪的侵略』であるのみならず、それはその値するもの以上に高くつく。全人民がその費用を支払う一方で、一握りの人々が全利得を獲得する。」^②あるいは、「勤労者が、合衆国の農場や工場での東洋人との競争という見込みに対し、あからさまな驚きをもってみるのは何ら不思議ではない。」さらに、「併合の間接的犠牲について考えよう。重大な国内問題が解決を求めている。我々には、必要もないのに海外の紛争に首を突っ込むべく、それらを無視する余裕があるのか？」また、「特殊利益が自らのまわりに法的防壁をめぐらせ、生産的産業から増大する税を搾取している時に、大部分の人々が、『天命』の夢想にうつつをぬかしておらねばならぬのか？」「遠隔の諸島で『誰が国旗を降そうか？』という問いが公衆の注意を〔国内〕問題からそらしている限り独占は安全に繁栄しうるし、その時、誰が国内でトラストを根絶しようか？」「経済問題にかえて条約をめぐる論争をおくことは人民に何を失わせるのか？」等々。^③

以上の引用で、ブライアンがきわめてエモーションナルにはあるが、帝國主義の根源を独占（トラスト、特殊利益）として感知し、その第一の被害者はフィリピン人民ではなく、直接的・間接的打撃をこうむる国内の人民「勤労者」と考えていたことは明白である。実はこの把握は銀貨、トラストをめぐる彼の理解と一致している。つまり、敵としての独占と、味方「被害者」としての国内人民という二元論と同じ枠内で帝國主義の問題が捉えられていたのである。彼にあっては帝國主義とはこの「独占―国内人民」という根本的矛盾が、外交政策を媒介にしてさらに噴出したものにすぎなかった。結局、彼の帝國主義本質理解は大枠としては既に述べた「内向性」の論理であるが、二元論的展開が含まれているため、その中でも特殊な「国内完結性」とでもよびうる質を有していたのである。だからこそ、彼は、国内人民を直接救済する国内政

治の優先を明言し、海外領土の処置をめぐる問題を迅速に処理し、従来からの銀貨、トラストなど国内問題に関する彼の基本的争点に集中するため、条約批准の促進を提言したのであった。²³

彼の帝国主義形態理解は反帝連盟全体の立場と一致している。本質認識については、問題(被害あるいは被害者)は国内にあるとする点、いわば、その論理の「内向性」においては、これまた一致している。ただし、根源――主敵の認識では、連盟全体の立場とは異なり、むしろブラッドフォード・マックネイル的認識に近似する。実はここにこそ、この両者が特殊マサチューセツにおいて若干の共闘の実績を持ち、のちの一九〇〇年選挙において、様々な困難をかかえつつも全国的な意味をもつ連合を形成していったことの論理的共通基盤があったといえる。

ブライアンも反帝連盟もともに国内問題優先の姿勢では一致していたとはいえないものの、ただ一つ重大な相違があった。それは反帝連盟がフィリピンの併合拒否をいうのみであったのに対し、ブライアンはその処置について具体策を提起していたことである。それは暫定的保護領化とでも言うべきものであり、その下で、貿易の拡大などの実利を保証されるというものであった。これは、ブライアンの背後に控えていた階層の中に、市場の拡大を望む西部、南部の農業利益が含まれていることへの配慮ともとれよう。一言にしていえば、ブライアンは常に、自らの背後にあると彼が信ずるアメリカの「人民」の利害を考慮の中心にすえる、極めてプラクティカルな政治家であり、この点、抽象論や理想論に依拠しがちないわゆる「反帝国主義者」とは決定的に異なっていたといえよう。

4 条約批准をめぐる連邦議会論戦

一月二〇日パリで調印された米―西間の講和条約の批准阻止に向け、反帝運動は連邦議会へ照準を合わせた極めて大衆的な闘いを展開した。運動は発祥地ボストンのみならず全国のあらゆる地域、階層に拡大しつつあった。一月半ば、反帝連盟執行委員会は三〇州以上において支部が結成されたと報告していた。ボストン、スプ

リングフィールド、ニューヨーク、フィラデルフィア、オハイオの中央労働団体が反膨脹決議をあげ、ゴンパーズもA・F・L・全国大会で条約批准阻止の決意を表明していた。また、海外領土からもたらされる農産物との競争を恐れる西部・南部の砂糖キビ、ビート、タバコ、米などの生産者も、マイルリックの農業紙などに代弁されつつ、地元出身の上院議員へ反対への圧力をかけていた。上院ではホーアが、反帝連盟の手になるあわせて約五千人の署名つきの反対請願を提出した。

さて、条約は一八九九年一月四日上院外交委員会に提出された。これ以前より始っていた、海外領土併合をめぐる連邦議会論戦では、特に、南部、西部の民主党議員を中心に、軍備強化による人民負担の増大、移民の流入の脅威、商業利益の見込みのないこと、膨脹はアメリカ人民を搾取すべく、金権的マッキンレー政府によって仕組まれた陰謀であること、植民地政策の憲法上の問題などの論点が提起された。連邦議会論戦のハイライトは、一八九九年一月九日のジョージ・ホーアの上院演説であった。ホーアの演説内容を紹介する前にこの人物の反帝運動への取り組みの姿勢についてふれておこう。そもそもホーアはこの運動を個人的に、連邦議会論戦を通じてのみ闘う意向を持っていた。だから、彼は反帝連盟の結成会議にも招待をうけながら出席していない。もっとも彼は反帝連盟の存在を否定していたのではなく、いわば情報センターとしての意義のみを認めていたのだ。さて、議員席と傍聴席にあふれた聴衆を前に行った演説の核心において彼は次のように述べた。

「我々が今取り扱わねばならぬ問題は、分離しており、明瞭に異なる、人口歴大な一民族と、今後、アメリカ人によって居住されず、アメリカ合衆国に編入されず、それがために、憲法が制定された目的を果し、執行することに参加しない一領土を、その同意なく、またその意志に反して征服し、統治することを連邦議会は許されるのか、そして、この民族を、合衆国人民の、一般的福利、共通の防衛、より平和的統一、より聖なる自由などのためにではなく、統治される民族にその意志に反して授与される何らかの現実の、あるいは空想上の恩恵のために、この民族を征服し、支配し、統治することを連邦議会は許されるのかということである」^②。

彼は、戦略的、経済的、民族的、気候的理由での併合反対も唱えたが、引用した部分にもみられる、極めて抽象的な政治原則論をその主要な反対の論拠としていた。この論議は反帝連盟の公式言明やストーレイの発言と重なり合うが、それらよりも一層抽象的である。見る限りの発言では、やはり、彼も、西半球以外の海外領土の政治的支配(併合)を帝国主義の形態と考えていたようである。また、その本質についてであるが、引用文後半より判断すれば、彼の究極的な関心は、海外領土の民族の自由ではなく、国内における自由の維持にあったとみられる。それ故、彼もまた、被害は国内にあるとみていたといえよう。しかし、その根源認識については全く窺い知ることができない。

いずれにせよ、このような帝国主義把握は反帝連盟の公式声明、あるいはストーレイの発言などと一致する。

二月六日の採択において、条約は五六対二七で批准された。これは批准に必要な三分の二の多数を僅か一票超えるものであった。賛成票の大部分は共和党議員によって投ぜられた。反対票の大部分は民主党議員によって投ぜられたが、ホーア他二名の共和党議員も反対にまわっていた。反対した民主党議員の三分の二以上は南部あるいは境界州出身であった。

膨脹主義者のヘンリー・C・ロッジに、「我々が知るうちで最も接近した、最も苦しい闘いだった」と言わせた批准阻止の闘いは終わった。たしかに、敗北であった。しかし、反帝運動はその闘いの第一幕を終えたばかりであった。この第一期反帝運動のフィリピンへの対応は併合拒否であった。またその運動形態は、大衆的裾野をもちながらも、結局は議会論争という狭い枠に収斂して行くものであった。そして、その最大公約数的帝国主義理解は、少くとも帝国主義なるものの現象形態は海外領土の武力による政治支配であり、その最大の被害者はアメリカ、あるいはアメリカ国民であるとするものであった。

ホーアの議会演説はたしかに、この期の反帝運動のハイライトであった。しかし、彼こそは、この期の反帝運動の有していた、フィリピン処置策、運動形態論、帝国主義理解のそれぞれの最大公約数、したがって限界を体现するのに最もふさわしい人物であった。しかし、我々はすでに、反帝運動内には、その運動形態論、帝国主義理解において、ホーアに示

された最大公約数的見解を打破する部分のあることを確認している。彼等をふくめて、第一期反帝運動はたしかに未分化な状況にあったといえよう。

- ① Schirmer, *op. cit.*, p. 75, Maria P. Lanzar, "The Anti-Imperialist League," *Philippine Social Science Review*, III, No. 1, (Aug. 1930), pp. 8-11, Tompkins, *op. cit.*, p. 124, pp. 155-158, Harrington, *op. cit.*, p. 217, Makoto Takagi, "Divergent Influences in the Anti-Imperialist League," 東京大学教養学部人文科学紀要 No. 10, *American Studies*, No. 1, (1956), p. 10, 13. なお、ウィンスローは実業家、オスボーンは元学校、バーンズは出版業者、アトキンソンは元実業家の評論家、ハスキンスは弁護士。「ホストン改革者グループ」には、カール・シュルツ、ジョージ・ホープ、チャールズ・フランシス・アダムズⅡ世等は含まぬ。ただし、反帝連盟の副会長にはアトキンソン、ストーリー、ブラッドフォード等も含まれているが、オスボーン、彼等はホストン改革者グループに含まれる。
- ② Lanzar, *op. cit.*, p. 8.
- ③ *Ibid.*, p. 9, Schirmer, *op. cit.*, p. 76.
- ④ Lanzar, *op. cit.*, pp. 8-9.
- ⑤ *Ibid.*, p. 10.
- ⑥ Schirmer, *op. cit.*, p. 75, 76.
- ⑦ *Ibid.*, p. 76.
- ⑧ *Ibid.*, p. 77.
- ⑨ Tompkins, *op. cit.*, p. 126, Takagi, *op. cit.*, p. 11, ブロムカランダの方針について詳しくは Lanzar, *op. cit.*, pp. 13-15 参照。
- ⑩ ワレンは弁護士、ムンローは製造業者で著述家、マイヤーズは弁護士、エンディコットは会社役員。また副会長は最初一人、一八九九年秋には四三人に増えたが、その中その他目立った人々は、チャールズ・アダムズⅡ世、ウィリアム・グラハム・サムナー、グローバー・クリフトン、カール・シュルツ、ジョン・ニャーデン、農業紙編集者ノーバート・ペイリック、スタンフォード大総長デヴィッド・シメーン等。
- ⑪ *Ibid.*, p. 16.
- ⑫ Tompkins, *op. cit.*, p. 129, Lanzar, *op. cit.*, p. 17.
- ⑬ この点に关するマツダ人研究者ランサーの指摘については、*ibid.*, p. 21.
- ⑭ Schirmer, *op. cit.*, p. 100.
- ⑮ William Jennings Bryan, *Bryan on Imperialism*, (1970), pp. 3-4.
- ⑯ Schirmer, *op. cit.*, p. 78.
- ⑰ *Ibid.*, p. 97.
- ⑱ Bryan, *op. cit.*, pp. 5-6.
- ⑲ *Ibid.*, pp. 36-37, pp. 43-44.
- ⑳ *Ibid.*, p. 8.
- ㉑ 一八九九年一月七日、シカゴでの演説、*ibid.*, p. 14.
- ㉒ すなわち、一八九九年一月五日、「ニューモーク・ジャーナル」紙への寄稿、*ibid.*, pp. 41-45.
- ㉓ 彼の条約批准支持の動機については、Merle E. Curti, *Bryan and World Peace*, (1931), pp. 124-131, Paolo E. Coletta, *William Jennings Bryan. I. Political Evangelist 1860-1908*, (1964), p. 234, 237.
- ㉔ Schirmer, *op. cit.*, pp. 110-111. 労働者の対応については、Horace B. Davis, "American Labor and Imperialism prior to World

War I," *Science and Society*, vol. 27, (1963), p. 72.

② Takagi, *op. cit.*, p. 89.

③ Richard E. Welch, Jr., *George Frisbie Hoar and the Half-Breed Republicans*, (1971), pp. 226-228, 257.

④ *Ibid.*, pp. 232-233.

⑤ また、*ibid.*, chap. 7 参照。

⑥ 投票内容の詳細な分析については、Takagi, *op. cit.*, pp. 91-92, pp. 116-117, Tompkins, *op. cit.*, pp. 192-193 参照。

⑦ *Ibid.*, p. 194.

II 反戦運動の局面（一八九九年二月——一八九九年一〇月）

1 反帝運動の拡大及び反戦運動化

条約批准阻止の闘いはたしかに敗北した。これによって反帝運動が終息したかといえば、事態は全く逆であった。

一八九九年二月四日、フィリピンのマニラ郊外で、以前より緊張関係にあったアメリカ軍とフィリピン共和国軍が戦闘状態に入った。この戦争勃発はアメリカ側によって用意周到に仕組まれ、最初に発砲したのもアメリカ側であることは今日明らかである^①。

フィリピン戦争の勃発は、条約批准阻止の闘いの敗北にもかかわらず、反帝運動をこれまでになく熱っぽい、大衆的な拡がりをもった運動へと高揚させていった。

早くも、二月七日、反帝運動のもう一つの機関紙と化していた「スプリングフィールド・レパブリカン」紙は次のように論じた。条約の批准は何も解決させていない。併合問題は未解決であり、公衆の対論によってくつがえすことができる。合衆国は戦闘を停止し、フィリピンの反乱者と公の交渉を開くべきだ。「彼等のところへ行け。そして、彼等の同意に基かぬ併合を目論んではない」と明言せよ。合衆国の政策は、彼等に自ら統治する国家を形成させ、そのうち撤退することであると明言せよ^②。

また、二月一〇日、反帝連盟はポストンで一般集会をもった。この集会では、フィリピンにおける即時停戦と、連邦議

会による、同諸島に対する自治と独立の賦与の誓約を要求した決議が、「大きな熱狂のうちに満場一致で採択された。」^⑧

この期、連盟はとりわけ労働者・農民の組織化に努めた。例えば、三月二一日、ボストンで開かれた公衆集会では、ゴンパーズ、マックネイル、ヘンリー・ロイドなど有力労働指導者が演壇に立った。その中で、ゴンパーズは、労働者による、フィリピン向けの武器・軍備製造のボイコットすら示唆した。また、「労働騎士団」の財政部長であり、反帝国主義の立場をとるジョン・ヘイズも自ら労働者向けの反帝国主義パンフレットを作成して労働者に訴えていた。しかし、反帝連盟への労働者の参加は有力指導者の域をなかなか出なかった。^④

さて、運動は本拠ボストンではもちろんのこと、全国に拡張した。このエネルギーを結集し、誇示し、さらなる飛躍の契機とすべく、一八九九年四月、ボストンとシカゴにおいて、二つの大集会が開催された。

まず、四月四日のボストン集会はバウトウェル、ブラッドフォード、ウインスロー、マックネイル等、ファナル・ホール会議以来のボストンの有力指導者の参加、著名なマッグワンプや「ボストン中央労働組合」などからのメッセージなどを得て開会された。

主弁士であるバウトウェルは、フィリピンでの戦闘は「侵略的で、不正義で野蛮な戦争」である、我々は、以前の盟友を現実には裏切っていると非難した。フィリピンへの措置については、フィリピンにおける戦闘の即時停止、諸国家の中で独立・対等の国家であると認められるような統治を自ら形成するに際してのフィリピン人への援助、の二つを要求することを連盟の基本方針として提案した。この提案を盛りこんだ決議が採択された。^⑤

実は、この集会の背景において、ボストン改革者グループとホーアとの乖離が表面化していた。バウトウェル、ウインスロー、ブラッドフォード、アトキンソン等がホーアにこの集会の議長として出席するよう懇請したのに対し、彼はこれを拒否した。ホーアの拒否は他でもない、彼の反帝活動の形態がきわめて個人的で議会闘争に限定されたものであったことに由来していた。ここに、上記ボストン改革者グループの広範な国民運動構想との矛盾があった。事実ボストンでは彼

のこのような姿勢に対し、反帝運動の発展を妨げ、「古巢の陣営（共和党）に手ごころを加える」ものだという批判の声があがっていた。^⑥

さて、一方、シカゴの大集会は四月三〇日約三千人の参加を得て催された。同集会は「リパティ・ミーティング」と呼ばれ、その目的は、「アメリカ帝国主義、とくに力によってフィリピン諸島の住民を従属させんとする合衆国の試みに抗議すること」とされていた。主要な呼びかけ人はノースウエスタン大学総長ヘンリー・ロジャーズ、著名な社会改革者ジーン・アダムズ、法律家で、このうち全国的にも有力な反帝運動指導者となるエドウィン・スミスであり、議長はロジャーズが務めた。参加者は中西部の学者、聖職者、社会事業家を主体にしていた。^⑦

同集会で採択された決議は以下のようなものであった。

「……我々は、統治はその正当な権力を被治者の同意から抽出していると今なお主張する。……我々は、アメリカ人命の犠牲を思いやり、全国民とともに悲しむ。……我々は、政府がこの犠牲をたらす状況を作り出したのだと主張する。……我々はスペイン流の方法によるアメリカ帝国の拡張に抗議し、スペインによって開始され、我々によって継続されている、自由に敵対する戦争の即時停止を要求する。……我が政府は、適当な秩序の保証のもとに、彼等（フィリピン人）が永らく闘い求めてきた独立を賦与するといふ意向を直ちにフィリピン人に告知すべきである。また、外交的手段により、諸国家の合意のもとに、この独立の保障を追求すべきである。」^⑧

さて、以上、二つの大集会の決議、あるいはそれに先行する新聞論調、諸集会の決議などから判断して、反帝運動はこの時期、フィリピン処置についての具体策をはじめて提起したといえる。以前は、いわばフィリピン「突き放し」であったものが、条約批准、戦争勃発という状況に促迫されて、即時停戦、独立賦与の言明、合衆国あるいは国際的合意によるその保障といった措置を明らかにした。様々な方面から提案されていたフィリピン措置策の間には、与えられる保障、あ

るいは保護の内容、その、独立賦与言明との時間的前後関係などについてニュアンスの相違があり、中には、保護領化構想へ傾いたものもあったが、反帝運動の構想は、即時停戦、即時独立賦与言明であったとみてよからう。ともかく、ここで、反帝運動は反戦運動、独立賦与誓約獲得運動（独立支援運動ではない）へと転回した。

2 志願兵帰還運動

フィリピン戦争が勃発して以来、フィリピン軍側の恐るべき損害については報じられていたが、アメリカ軍側の状況については殆ど公にされていないかった。しかし、フィリピンで戦っているアメリカ軍兵士の状況や自分たちの感情について故国に手紙を送っていた。兵士の親や友人たちは新聞などにそれを転送した。連盟はフィリピン戦争の実情について広く国民に知らせるため、「兵士の手紙」を編集し、出版した。いくつかの手紙はこの戦争の残酷さとジェノサイドの性格を赤裸々に物語っていた。例えば、カンサス連隊のある大尉はマニラ郊外カローカンでの戦いについて、「カローカンには一万七千人の住民がいると思われていました。第二〇連隊はそこを掃討しました。現在カローカンには一人の生存者もいません。建物のうちでは、大きな教会と不気味な牢獄のくずおれた壁が残っているだけです」と書いてきた^④。

こうした性格の戦争はアメリカ軍兵士の士気を低下させ、彼等の間に厭戦気運を醸成し、帰還を求める声をあげさせていた。例えば、三月三〇日、「ボストン・イブニング・トランスクリプト」紙はホンコン經由マニラからの無検閲の通信文として次のように報じた。「合衆国志願兵の過半数は帰還を熱望している。……『我々はニガー(Ginger)と戦うために志願したのではない』というのがいつも聞かれる言葉である」と。また、「フィラデルフィア・タイムズ」紙は、本来の兵役期間が終了した後は、もう服務は望まぬという第一〇ペンシルヴェニア連隊の志願兵の全員一致の決議についてのべた手紙を掲載した。さらに、ミネソタ州知事リンドは、「連隊は直ちに送還され、兵役を解除さるべし」と要求した第一三ミネソタ志願兵連隊からの電文を公にした^⑤。

志願兵の訴えは国内の親族や友人たちの間に、志願兵の帰還運動を呼び起し、これは全国的な運動へと発展した。

まず、二月初め、カリフォルニア州上院は、第一カリフォルニア連隊はフィリピンで除隊になり次第送還されるよう要請した。三月には、第一〇ペンシルヴェイニア連隊の兵士の親族、友人が志願兵の死傷者に関する情報は隠されている、死者はあらゆる公式報告を上廻るといふ手紙をマニラから受けとり、これを機に兵士の帰還を求める有力な運動を開始した。四月に入ると帰還運動はさらに拡大した。テネシー州ナッシュビルではテネシー連隊の送還を求める大衆集會がもたれた。オレゴン州の志願兵の親族、友人たちは、「決してこのような戦争のために志願したのではない」として、志願兵の帰還を要求した。ミネソタ州知事リンドは州議會へのメッセージにおいて、同州出身兵士の即時除隊を勧告した。また、サウス・ダコタでは、ポピュリストの知事リーがマッキンレーに、フィリピン戦争は「統治の根本的原则に背馳」するものであり、サウス・ダコタ州出身兵士は、その意志に反して陸軍に拘束されているといふ手紙を送った。さらに、第一ネブラスカ連隊の数百人の兵員の親たちは、「政府は、ルソンの土を肥すために、その貴い、熱に打ちのめされ、弾丸に引裂かれた身体を捧げているのではない人々を送還すべきである」との要求をマッキンレーにつきつけた。^⑩

政府はこのような広範な国民の要求に押され、四月一六日、志願兵を帰還させる用意のあることを言明せざるをえなくなった。^⑪

3 コンフォーミティをめぐる葛藤

反帝運動の反戦運動、独立賦与誓約獲得運動への転回と、それに触発され、また、それを下から支えた国民的運動の高揚は政府を窮地に立たせた。しかし政府は一方で、フィリピンからの兵士の帰還を認めつつも、他方で、反帝運動とその活動家に対して、「反逆者」(Traitor)とする恫喝を加え、コンフォーミティ(体制信従)を迫った。既に、政府支持者の中にはホーアらを「反逆者」呼ばわりするものもいた。親政府系新聞の報ずるところによれば、四月二一日の閣議におい

て、政府は、「反帝連盟に結びつき、影響されていると信じられるこの国の反膨脹主義者は在フィリピン志願兵に手紙や電報を送り、その不満を煽っており、それがホンコン經由マニラからの悲觀的報告や志願兵連隊の召還要求の背景にあることを発見し」、これは「積極的の反逆である」とみなしうるとして、「このように政府の妨げとなつてゐる人間を摘発」することを決定したといふ^⑤。

政府の攻撃に対し、真正面から応戦したのがアトキンソンであった。彼は四月二二日、在フィリピンの五百ないし六百人の將校と兵士に自作のパンフレットを郵送するために、その氏名、住所を教えるよう陸軍省に要求した。陸軍省が返答に窮している間に、彼はパンフレットをフィリピンにいるデューイ提督以下、將校、文官などにテストケースとして郵送した。政府は動転し、司法長官は、「アトキンソンは、その煽動的な文書の故に告発され、莫大な罰金と懲役一〇年に相当する」と断じたといふ。結局、郵政長官の命令で、アトキンソンのパンフレットはサンフランシスコにおいて、フィリピン向け郵便物の中から抜きとられた。この事件は全国にセンセーションをまきおこした。しかし、反帝連盟の執行委員会は、アトキンソンを支援するどころか、彼の行為は連盟とは無関係な個人的行為であるとして冷淡な態度をとつたため、彼は憤慨した^⑥。

実は、反帝連盟執行委員会の態度はこの期コンフォーミテイの強迫という形の攻撃をうけて反帝運動側に生じていた動揺あるいは後退を象徴していた。

反帝運動にとって問題はフィリピンと交戦中である国の市民として、アメリカ軍の敗北までも期待するのか、即ち、国境を超えてフィリピン人民と連帯するのか、あるいは、不正義の戦争に反対しながらも、市民として最低限の忠誠は政府に与えるのか、この二つ間の選択にあつた。

この点、「スプリングフィールド・レパブリカン」紙は、「このような類いの戦争への反対者として我々はその停止と責任ある人々の辞任を求めて煽動してもよからう。しかし、戦争が継続している間は、政府は市民の支持を受けるに値す

る」と主張し、後者の立場をとった。一方、執行委員長のウインズローは、「憲法に対するこの攻撃的な陰謀を敗北させるための唯一の方途は大統領の行っている戦争を妨害するか、あるいは、もし可能ならば、麻痺させることであるとはつきり厳肅に主張すべきである」と前者の立場を選択していた。この中で、反帝連盟執行委員会の過半数は「スプリングフィールド・レパブリカン」紙のような穏健な立場をとっていた。だからこそ、執行委員会はアトキンソン事件に対し冷淡な対応を示したのであった。^⑤

しかし、反帝連盟執行部のコンフォーミティをめぐる動揺は、その堅持してきたフィリピン措置策についての動揺すらもたらずに至った。即ち、上述した閣議の「反逆発見」の報の直後、執行委員会はマッキンレーに電報を打ち、フィリピンが合衆国の海軍根拠地のため、一つの小島を割譲し、合衆国からスペインに支払われる二千万ドルを引き受けることを交換条件に、合衆国による五年間の軍事占領のうち、フィリピンに独立を与えるべし、という提案を行った。悪いことに、新聞のミスプリントによって、a small island とあるべきところが、small islands と複数形で報じられた。政府側はえたりとばかりにこれにとびつき、マッキンレーの構想との近似性を強調した。これは反帝運動の立場からすれば、大変な後退であった。^⑥

執行委員会の後退に対し、下部から激しい抗議がおこり、この電文を取り消すための反帝連盟の会議を開催せよとの要求が出された。執行委員会も迅速に対応し、五月一六日反帝連盟の会議がもたれた。ここにおいて、出席者は、戦争勃発以来堅持してきた立場、即ち、戦争の即時停止、フィリピン独立の躊躇なき承認、フィリピンに対するアメリカ主権の要求放棄を再確認した。そのうえ、「不条理な新聞検閲」と「郵便物への高圧的な侵害」を非難して、コンフォーミティの強要に反撃していた。もちろん、電文にあった五年間の軍事占領と海軍根拠地割譲の項目は否定された。^⑦こうして、反帝連盟執行部も本来の立場に復帰した。

実は、このような動揺は反帝連盟執行部に限られたものではなかった。戦争勃発というコンフォーミティの保持を強迫

する状況の中で、反帝國主義を言う人々の中に転向するものがかなりあった。これまで、反帝運動の機関紙的存在だった「ボストン・イブニング・トランスクリプト」紙の政府支持への転向、ボルティモアの著名法律家C・J・ボナベートの反帝連盟副会長就任撤回等々^⑩。しかし、何よりも反響を呼んだのは、つい前年の一二月、帝國主義はアメリカの歴史、伝統、制度に反するという理由をもって反帝國主義の立場を公にしたばかりのチャールズ・フランシス・アダムズ・ジュニアの変節であった。彼は一八九九年五月、とくにアギナルドの反乱行為(彼によれば、フィリピン人がアメリカ人を殺したこと)は、独立、そして、最少限のアメリカの保護と助言つきの自治の許可という反帝運動側の構想を台無しにした。今や、反帝運動側には、現状を容認したうえで、最少限のアメリカの干渉付きの最大限の内政自治をフィリピン人に保証するよう政府を促すことしか残されていない、と述べた。これは、フィリピンの独立要求すら放棄したもので、執行委員会のマッキンレー宛電文以上の後退を示している。しかし、両者に共通していることは、各々のコンフォーミティをめぐる対応は、必然的にそのフィリピン措置策と密接に関連していたことであった。

ともかく、一八九九年春から夏にかけての時期における、コンフォーミティをめぐる動搖はフィリピン措置策の動搖を伴い、アダムズのような上層部分の転向を生んだものの、下部からの強固な突き上げによって、反帝運動全体としての姿勢は短期間で回復された。しかし、コンフォーミティそのものの問題についてはやはり曖昧さが残されており、晩夏に及んで、それへの対応が明確化されて行く。

八月末、ブラッドフォードはコネティカット平和会議においてこの点にふれた。「アギナルドとその仲間がマッキンレーの任期切れまでその抵抗を長引かせること、あるいは、もし力によって敗北させられたにせよ、彼等の上に安定した支配をしくことに我々が失敗することを……熱烈に望む」と、いわばフィリピン人民との精神的連帯を表明した。これに対し、出席者の一人は「反逆的」であると非難した。しかし、ボストンでは、「フィリピン人との精神的連帯」の呼びかけは好感をもって迎えられた。「スプリングフィールド・レパブリカン」紙は、「まさしくそれだ。それがまさに言うべき

ことだ』、と車の中で人々が言っているのがもれ聞こえてきた』、と市民の反応を報じている。ボストン改革者グループのうち、ブラッドフォードなどラディカルな部分は、どうやら、コンフォームィティをめぐる問題でも、最も積極的にその克服を目指しており、すでにフィリピン人との精神的連帯(精神的であるが故に限界があるのだが)の域にまで達していたといえよう。

4 「アメリカ反帝国主義連盟」の結成

一八九九年夏、フィリピンでのアメリカ軍の作戦行動は、フィリピン共和国軍の驚くべき抵抗にあつて押しとどめられていた。フィリピン軍はたやすく掃討されうるといふ、軍当局の当初の確約とは逆に、戦線の膠着状態は誰の目にも明らかになり、アメリカ国内では一層の戦争批判、厭戦気運が拡まった。政府、軍当局者の間にすら、戦争を批判するものが現れた。例えば、カローカンの戦いで勲功のあつたファンストン將軍は、自分は、「強固なものではないが」、反膨脹主義者であり、若干の「大シンジケートや資本家」以外にとつてはフィリピン諸島からの利得は何もない、と公言した^④。

批判は、また、検閲への抗議という形でジャーナリストの間にも生じた。七月九日、強固な膨脹主義支持の新聞や通信社のマニラ駐在通信員たちは、アメリカ本土への通信文になされる軍の検閲に対する共同の抗議書を駐フィリピン軍指令官に提出した。彼等は、指令官は、「本国の人々を驚かすという理由で、フィリピンの状況について全真実を書かせてはくれぬ」、と非難していた。この抗議書は七月一七日に本国でも公になり、政府側には打撃を、反帝運動側には鼓舞を与えた。政府は当初平静を装っていたが、一週間後、陸軍長官アルジャーの辞任を明らかにした。アルジャーは以前より別件で失政の責を問われていたが、この期に至つての辞任には、高揚している戦争批判をかわす狙いがあったといえよう^⑤。

反戦の闘いは反帝運動の基盤を拡大した。七月中旬にウィンスローは、連盟は四万会員と四〇支部を持ち、事務所には毎日数百通の手紙が殺到していると誇つた。「ボストン・グローブ」紙は、ボストンのビジネス街にある連盟本部の小さ

な部屋を「全国津々浦々までも席卷する大論争の台風の眼」と呼んだ。運動の高揚の中で、ボストンからの支援を得て、八月にはシカゴに、九月にはワシントンにそれぞれ反帝連盟が設立された。^②

このような気運を背景に、一〇月一六、一七日、シカゴにおいて、反帝國主義全国大会が開催されるに至った。ここに結集した二九州からの百人以上の代表は、反帝組織の全国センターとして「アメリカ反帝國主義連盟」の結成を決定した。本部はシカゴにおかれた。しかしこの組織はきわめて名目的な存在で、運動の実質は依然として旧来の「反帝國主義連盟」(この大会で「ニューイングランド反帝國主義連盟」と改称)が担って行く。^③新組織の会長は旧組織のそれと同じくバウトウエル、書記はウィリアム・ミッズ、会計はフレデリック・グーキンであった。また、エドウィン・スミスを長とし、九人から成る執行委員会、それに、旧組織のそれと人的に多くが重複する多数の副会長職が設けられた。

大会に続いて開かれた大衆集会は、報ぜられるところによれば、約一万人の参加を得た熱狂的なものであった。議長はクリブランド政権の農務長官J・S・モートン、主要な弁士はシュルツ、バーク・コ克蘭、エドウィン・スミス、アトキンソン等であった。

この場で、以下に掲げるような「アメリカ反帝國主義連盟」の綱領が採択された。これは、この時点での反帝運動の最大公約数的見解を示すものとみてよからう。

「……我々は、統治はその正当な権力を被治者の同意から抽出していると主張する。……

我々は、我が兵士や水兵の犠牲をいたむ。彼等の勇氣は、たとえ不正義な戦争においてではあっても、賞讃に値する。……我々はフィリピン人の虐殺を不必要な惨事として非難する。……我々は、戦争の即時停止を要求する。我々は、連邦議会が速かに開かれ、……独立を……承認するという我々の決意を彼等〔フィリピン人〕に告知するよう勧告する。

帝國主義者は、アメリカの手にするフィリピンの自治の破壊とともに、ここ〔アメリカ〕におけるすべての反対は消滅するだろう

と思つている。これは嘆かわしい誤りである。我々は、『犯罪的な侵略』の戦争を嫌悪してはいるが、……それ以上に深く、国内におけるアメリカの諸制度への裏切りに義憤を覚える。真の戦線はマニラ郊外にあるのではない。敵は家内に生じている。……

……共和国が侵蝕されている時に、「貨幣の」価値基準について論争するものは、家が火に包まれている時に、ちっぽけな家内経済について口論するものと同じく、耳を傾けるに値しない。……

我々は重大な国家の危機においては、その政府を支持するという全ての市民の義務を現在の事態に適用することを拒否する。……我々は、力による民族の従属化を支持するいかなる個人あるいは政党の敗北にも寄与することを提起する。我々は、ホワイトハウスにおいてであれ、連邦議会においてであれ、非アメリカ的利得を追求する中で、アメリカの自由を裏切る全てのものの再選に反対する。我々は二大政党の双方が、来るべき新世紀のキャンペーンにおいて、独立宣言を支持し、擁護することをなお希望している。

我々は衷心より、独立宣言と合衆国憲法に忠誠を守る全ての男女の協力を期待する。^⑤」

綱領は、フィリピンへの措置については、即時停戦、独立賦与の言明を繰り返したにすぎない。注目すべきは、コンフォミティの問題と、今後の運動論である。まず、戦時における政府支持義務を明確に否定している。この点で反帝運動は春から夏にみられたコンフォミティをめぐる動揺を積極的な方向でかなり克服したとみられる。ただしフィリピン人の連帯の域にまでは達していない。また、運動論については、すでに一九〇〇年選挙に照準を向けつつ、通貨制度などについての論争の棚上げと、帝国主義候補の打倒がうたわれ、政党との連携の可能性が示唆されている。

さて、次に、ここに現われた帝国主義理解について検討しよう。帝国主義の形態が、武力による海外他民族の制圧、支配と考えられていることはいうまでもない。注目すべきは、その本質認識(根源―被害者認識)である。この運動の基本的関心がアメリカの制度あるいはアメリカ国民への脅威に向けられていたことは一読して判然とする。つまり、被害者は、アメリカの制度や国民なのである。一方、帝国主義の根源は何か？ たしかに敵とよばれ、国内にあると指摘されているものの具体的には一切明らかにされていない。反帝運動の最大公約数的帝国主義理解においては未だ「根源―敵」認識

は曖昧であった。しかし、その関心のいわば「内向性」はますます明白になった。

5 反帝運動と独占認識

我々は既にIの1で、ボストン改革者グループの中にはブラッドフォード・マックネイル派のように帝國主義の本質を、敵〓独占、被害者〓労働者(国内人民)としておぼろげながらも感知している部分のあったことをみた。このような認識をもつ潮流は、運動の第二期においても、運動の表面にはでなかつたものの、一層、その認識を鮮明化させ、人々の共感を獲得しつあつた。この認識は様々な場所で表明されていた。

「スプリングフィールド・レパブリカン」紙の通信員フランシス・サンボーンは、一八九九年三月二五日、同紙のコラムで、一九〇〇年選挙の展望にふれて次のように書いた。共和党への大衆的支持は「トラストの破廉恥な厚顔さと貪欲さへの憂慮」によって動揺させられている。「帝國主義とシンジケート組織とは、ミルトンにたとえていえば、罪と死のよななもの、シンジケート組織が母であり帝國主義は子である……」、と。また同年五月、シカゴでの大衆集会において、ジョン・スポールディング牧師は、合衆国は「我が国の巨大な資本家やトラスト貴族の指導に従っている」ためにフィピンを併合しつとあると指摘した。さらに、六月、バッファローで開かれた社会改革についての全国会議において、一人の西部の教育者が提案した声明が圧倒的多数で採択されたが、その一部は次のように指摘していた。「フィリピン諸島における我が征服戦争に表現されている……軍国主義は……人民による統治に代え独占による統治を打ちたてた金権的政治がもたらす、より重大な脅威の所産にすぎぬ」、と。「スプリングフィールド・レパブリカン」紙は、「シンジケート化された資本主義の侵略についての、力強く印象的な記述」としてこれを全面掲載した。また、七月四日、ボストンのアイルランド系アメリカ人の記念集会において、四千人の聴集を前に、イリノイ州選出のメーン上院議員は、フィリピンで戦い、死んでいるのはアメリカの勤労人民の息子たちであるのに、彼等は耐えるのみで、諸島から何も得ていない、「金の

投資場所を与えるために、我々は、さらに何人のアメリカの母親たちの心を打ち砕かねばならぬのか、さらに何人のアメリカの少年達を殺さねばならぬのか」と叫んだ。^⑧ また軍当局者の間にすら、このような認識を表明するものがいたことは既述した。

このように、第二期においても、根源∥独占、被害者∥国内人民とする帝国主義本質認識が表明されたが、それらは、反帝運動の最大公約数的認識に影響を与えうるには至らず、未だ下部に滞留していた。従って、反帝運動の最大公約数的帝国主義理解は、第一期から変わってはいなかった。

第二期反帝運動は、反戦運動、独立賦与誓約獲得運動へと転回した。だが、戦争に必然的に伴うコンフォミティの問題で動揺をきたし、それはフィリピン措置策についての後退すら伴った。またこの問題でチャールズ・アダムズらが運動から離脱した。このコンフォミティをめぐる葛藤は、実は、反帝運動の帝国主義理解の有する「内向性」に宿命づけられたものであったと推察される。またこの期、運動論をめぐってホーアも離脱した。分派が芽ぶいていた。

- ① Schirmer, *op. cit.*, pp. 126-130.
 ② *Ibid.*, p. 135.
 ③ *Ibid.*, pp. 135-136.
 ④ *Ibid.*, p. 139, Tompkins, *op. cit.*, p. 200.
 ⑤ Schirmer, *op. cit.*, p. 140, Tompkins, *op. cit.*, pp. 202-204.
 ⑥ Schirmer, *op. cit.*, pp. 140-141.
 ⑦ Lanzar, *op. cit.*, p. 24, Tompkins, *op. cit.*, p. 204.
 ⑧ Lanzar, *op. cit.*, p. 29.
 ⑨ Schirmer, *op. cit.*, p. 142.
 ⑩ *Ibid.*, pp. 151, 152. なお当時駐フィリピンアメリカ軍総数は約三万人で、そのうち、約一万二千人が志願兵だったと言われるこの点に
 ついては、*ibid.*, p. 149.
 ⑪ *Ibid.*, pp. 150-151.
 ⑫ *Ibid.*, pp. 151-152.
 ⑬ *Ibid.*, p. 152.
 ⑭ *Ibid.*, p. 153, Beisner, *op. cit.*, pp. 99-100, Lanzar, *op. cit.*, pp. 31-32.
 ⑮ Schirmer, *op. cit.*, p. 154.
 ⑯ *Ibid.*, pp. 154-155.
 ⑰ *Ibid.*, p. 155.
 ⑱ *Ibid.*, pp. 157-158.
 ⑲ Beisner, *op. cit.*, pp. 116-119, Schirmer, *op. cit.*, p. 158.
 ⑳ *Ibid.*, pp. 174-175.
 ㉑ *Ibid.*, p. 173.

²⁰ *Ibid.*, pp. 173-174.

²¹ *Ibid.*, p. 175, Tompkins, *op. cit.*, pp. 134-139. 一八九九年末までには、その他、ニューヨーク、フィラデルフィア、スプリングフィールド、シンシナティ、セントルイス、ロサンゼルス、ポートランド、クリーブランド、ボルティモア、デトロイト、サンフランシスコなどにも連盟が設立されたという。この点については、Lanzar,

op. cit., pp. 21-22, Takagi, *op. cit.*, pp. 14.

²² なお、以後、反帝連盟と略記した場合は実質的に「ネーションランド連盟」を意味する。

²³ *Ibid.*, pp. 117-119.

²⁴ 以上 Schirmer, *op. cit.*, pp. 163-164, 167.

Ⅲ 一九〇〇年大統領選挙をめぐって——政治戦——(一八九九年一〇月——一九〇〇年一月)

1 反帝運動内における諸政治路線

既に、一八九九年一〇月の「アメリカ反帝国主義連盟」設立の時より、反帝運動の照準は明確に一九〇〇年大統領選挙に向けられていた。この時の方針は未だ不明確であった。しかし、現実的に考えて、反帝運動にとって、選択は次の三つしかありえなかった。1・民主党ブライアンを支持し連合する。2・反帝国主義を掲げた第三党を結成する。3・共和党に働きかけ、反帝国主義の立場に引きよせる。

ボストン改革者グループのうち、ブラッドフォード・マックネイル派は早くから第一の路線への傾斜を明らかにしていた。ブラッドフォードは早くも一八九八年夏、民主党に、反帝連合を実現すべく強い反帝国主義の立場をとるよう呼びかけていた^①。またウインスローも、この路線に加わり、一八九九年一月の反帝連盟第一回年次大会において、「戦い終るまでは、我々の目的は、すべての瑣末な争点からの完全な独立を維持することであるべきである。……我々は、共和黨員であろうと、民主党員であろうと、金貨支持派であろうと、銀貨支持派であろうと、マッグワンプであろうと、一つの重い、死活的で巨大な問題、即ち、反帝国主義と共和国維持のために、我が組織において互いに肩を組まねばならぬ」と通貨問題などを無視して、反帝国主義の一点での連合路線を提唱していた。彼はこの時点で共闘相手を民主党に限定し

てはいなかったが、彼のこの頃の行動から判断して、この発言は暗に民主党との連携をほのめかすものであった。^②

一八九九年秋のマサチューセツツ民主党大会においてはこの連携が確認され、選挙ではそれが実践された。この大会では、一九〇〇年の全国大会に向けてブライアン派の代議員の派遣を決定したのち、候補者を指名したが、州財務長官候補にはヘンリー・ロイドが指名された。大会では、弁士がフィリピン戦争の停止を要求し、帝国主義と英米同盟を非難した時、最大の拍手が起ったといわれる。州大会綱領は、「その成長が人々を驚愕させ、仰天させている大独占企業は、帝国主義と軍国主義の中に自らの防衛の為の双子の代理人を見出し出している」^③、と指摘した。

この秋の選挙においては、民主党が全国的に進出した。マサチューセツツでは民主党は敗れたものの、ポストン市では共和党を上廻った。その他、オハイオ、ネブラスカ、メリーランドでも民主党は共和党に迫った。この結果について、マサチューセツツのブライアン派民主党の指導者ジョージ・ウィリアムズは、「ウィンスローやその背後にいる人々」が民主党に多くの票をもたらしたと、反帝運動の寄与を認め感謝している。^④

一九〇〇年に入るとブラッドフォードらの方針はポストン改革者グループの殆どの支持を集め、二月初めまでに、会長のバウトウェル、T・W・ヒギンソン、サンボーン、P・A・コリンズなどがブライアン支持を表明するに至った。^⑤

しかし、反帝運動にとって事態は単純ではなかった。つまり、反帝国主義者の中には、反帝国主義のチャンピオンとしてのブライアンは容認しえても、銀貨自由鑄造のそれとしての彼は許容しえないという部分がかかり残存していたのであった。カール・シュルツはこの苦悩を象徴する人物であった。彼は、帝国主義とは熱帯地域の政治的支配(併呑)だとみなし、その最大の悪はアメリカの統治の原則と伝統——即ちアメリカ自身の福利と統一——を侵犯することにあると考えて、反帝運動に参加していたのだが、政治路線については、「もし苛酷な運命によって、マッキンレーの帝国主義政策と反帝国主義候補としてのブライアンとの間の選択を迫られるようならば、私は、私の個人的嫌悪のすべてを腹藏し……ともかく、帝国主義を敗北させるよう試みる事が私の義務——おそろしい義務——だとみなすでしょう」とチャールズ・ア

ダムズにその苦衷を吐露していた。^⑥

このようなディレンマに悩む人々は、「反帝国主義を旗印にした第三党を結成して選挙を戦うことによってこの隘路からの脱出を試みた。一九〇〇年一月六日、ニューヨークのプラザ・ホテルにおいて、第三党結成を検討するための会合がもたれた。主要な出席者は、シュルツ、ジョン・チャップマン、カーネギー、ペティグルー上院議員、エドウィン・スマス、ジョン・ヘンダーソン上院議員、ブラッドフォード等であった。ここにおいて、第三党結成が決定されたが、カーネギーが鉄鋼トラストの圧力によって、約束していた資金援助を撤回したこと、招待されていたゴンパーズらの労組指導者が不参加であったことなどから、二ヶ月もたたず、この計画はついでに^⑦。しかし、シュルツを中心に第三党結成路線は選挙直前まで執拗に追求されて行く。

さて、第三の選択としての共和党への働きかけ路線はホーアその人に体现されていた。彼は、「ブライアンの当選は我が比類なき繁栄の破壊、我が「通貨」価値基準の下落を……意味する」とし、またブライアンの反帝国主義は信用できぬとして彼をきっぱり拒絶した。また、一月の第三党結成のための会議にも招待されたが出席を拒否した。そして、唯一の方途は、「共和党あるいは十分な数の共和党員を説得して、健全で純正な政策をとらせること」であると結論づけた。これに対し、「スプリングフィールド・レパブリカン」紙は、「かつて政治家というものが、かくも辻褃の合わない無力な結論に達したことがあっただろうか」と批判を加えた。^⑧

これらの三路線、とりわけ先の二路線の競合、交錯の中で、ブライアンとの連合路線が有力化しつつあったが、反帝運動全体にとっては、未だディレンマや困惑は残存していた。ポストン改革者グループのうち、M・ストーレイはシュルツとともに、最後まで悩み、第三党構想に固執することになるのだが、彼は、「一言でいえば、私は帝国主義に反対投票したいし、ブライアンに支持投票したくない」とそのディレンマを端的に告白している。^⑨

一九〇〇年二月末、ワシントン生誕記念日に、反帝国主義者はフィラデルフィアで全国会議をもった。ここで、ブラッ

ドフォードその他の人々はブライアン支持を強く訴えたが、結局、この会議は帝国主義を支持する候補の拒否をくりかえし言明し、具体的政治路線については、二大政党の全国大会の動向を待つことを決定した。^⑩

また、五月二十四日、ニューヨークで開かれた反帝国主義大衆集会では、来るべき選挙においては、帝国主義の問題を最高の争点とし、関心をよせるすべてのアメリカ市民の統一を訴えた決議が採択された。^⑪

2 ブライアンと民主党

ブライアンは批准促進に手をかし、多くの反帝国主義者の憤怒と不信をかったものの、その後も、以前からの主張をくりかえしつつ、反帝国主義者に、帝国主義反対の闘いを共に前進させるよう訴えていた。^⑫

しかし、彼は一九〇〇年選挙においては、当初、反帝国主義を最高の争点として闘うことを肯んじなかった。それは、彼が条約批准を促進した経緯からして当然のことであった。彼は、一九〇〇年選挙も、一八九六年のそれと同じく、銀貨自由鑄造を第一の争点とし、それにトラスト、帝国主義が続くとみていた。一方で、彼はトラスト批判においてかなりの前進を示していた。^⑬

だが、前述したように、一八九九年中間選挙での民主党の一定の前進は、反帝国主義・反軍国主義など新争点の導入によることも明らかにになっていた。また、反帝運動の指導者とブライアンとの間には、フィラデルフィアの反帝国主義会議に出席したブライアンの助言者エルウッド・コーザーを通じて連絡が保たれていた。コーザーは一九〇〇年春の間、ブライアンに反帝運動内での彼に対する支持あるいは第三党志向について絶えず情報を与え、もし、民主党大会が強い反帝国主義の立場を押し出せば、反帝国主義者は民主党を支持するだろうとの見通しを伝え、また、ブライアンとエドウィン・ミスとの会談を設定したりするなどの活動を行っていた。^⑭ 反帝国主義者の中にはブライアンに銀貨自由鑄造を彼の争点から外すよう訴えるものもいた。^⑮ また、民主党内における一八九六年来のブライアン派対いわゆる「再建派」(reorganizers)

の内紛も、反帝国主義を争点にすることで糊塗される情勢にあった。^⑮

しかし、ブライアンは、一九〇〇年に入ってから依然として銀貨自由鑄造を第一争点とすることに固執していた。三月二日、出身地ネブラスカ州リンカーンで、彼は民主党の綱領問題にふれ、それは、「通貨、トラスト、帝国主義」の順であるとした。彼はまた、「帝国主義はその通商を征服によって拡大せんとするシンジケートの野望にその生気の源を有した」との関連づけも示した。^⑰ また、六月、「ノース・アメリカン・レビュー」誌への論文においても、彼は争点を通貨、トラスト、帝国主義の順に並べ、結局、一九〇〇年の選挙は、「金権政治と民主制との間の」、「ドルと人間との間の」闘いであると感じつけた。^⑱

さて、六月二日、共和党全国大会は、マッキンレーを再指名し、海外領土の民族に、「彼等の福利と我々の責務に合致した最高程度の自治」を許すべしとする綱領を採択した。^⑲ 「アメリカ反帝国主義連盟」執行委員会はこれを一蹴し、二月の決定どおり、さらに民主党大会に注目することを申し合わせた。しかし、他方で、執行委員長エドウィン・スミスは、もし民主党が強い「反帝国主義の立場をとらねば、反帝国主義者は第三党を結成するとの警告を与えた。^⑳

民主党指導者も六月には帝国主義についての綱領項目の準備に助力すべく民主党大会に代表団を派遣するよう「アメリカ反帝国主義連盟」を招待するなどして接近をはかった。ブライアン自身も折から作成中の民主党綱領の中で反帝国主義の立場を強化するよう指示を与えていた。^㉑

民主党大会は七月四日カンサスシティで幕をあげた。綱領委員会では銀貨についての項目をめぐる大いに紛糾したが、結局、妥協した形で、帝国主義を最高の争点とし、ついでトラスト、銀貨自由鑄造の順で項目を並べた草案が採択された。この草案は大会で熱狂的に承認された。大統領候補には当初からの予想どおりブライアンが指名された。^㉒

民主党綱領は、その半分近くを帝国主義・軍国主義批判に費していたが、そこに示された論点はすでにブライアンが述べてきたことのくりかえしにすぎない。しかし、注目すべき論点がある。それはフィリピンへの具体的措置について次

のように述べていることである。「我々は、第一に、安定した形の統一、第二に、独立、そして第三に、一世紀近くにわたって中南米の諸共和国に与えられてきた、外部からの干渉に対する保護、という国家の目的を即時表明することを支持する」^②。これは、即時停戦——即時独立賦与言明——合衆国あるいは中立化による保護、を唱える反帝運動の方針とははつきり異なり、むしろ、合衆国による保護領化をも許容しうる構想であった。この点で、同綱領は、ブライアンよりもさらに政府側の構想に近かったといえよう。さらに一つ留意すべきは、同綱領においては、帝国主義の根源が何であるかについての言及が全く欠落している点である。

このように、民主党綱領はその反帝国主義について曖昧な点を多々残していたが、この空隙を実はブライアンの指名受諾演説が埋め、反帝運動全体を究極的にブライアンとの連合に赴かせることになる。

ブライアンの指名受諾演説は、一九〇〇年八月八日インディアナポリスにおいて行われた。それは、演説の大半を帝国主義の問題にささげるようにとのウインスローの忠告をうけ入れたもので、タイトル自体「帝国主義」というものであった。今や、ブライアンが帝国主義を最高の争点にしたことは明瞭であった^③。しかし、このいわば、争点の「転換」も、Iの3で明らかにした彼の帝国主義理解からして、彼にとつては何ら矛盾のないものであった。

この演説は従来よりの彼の主張をくりかえしたものであったが、二つの特徴的な論点を有していた。

まず、これまでも述べてきた帝国主義における根源と被害者の認識、とりわけ被害者認識をより明瞭にしていること。たとえば彼は、「……帝国主義から最少の利益しか得ない人々こそが、それに伴う軍事負担によって最も被害をうける……。労働者と農民が共通に被っている害悪に加えて、労働者は、もし、東洋の従属民が合衆国に仕事を求めて到来する時、真っ先に苦しむ」^④、などと指摘した。

またフィリピンへの措置については、彼は、「唯一の対策、即ち、彼等〔フィリピン人〕に独立を与え、外部からの妨害に対し彼等を守ることを提案する」^⑤、とのべた。この提案は、基本的には、反帝運動側の即時独立要求の立場を承認す

るものであった。これは、民主党綱領の保護領化への傾斜が反帝運動側の不満を買っていることを考慮したものであったといえよう。

3 リバティ・コンGRES

さて、共和・民主両党の大会終了を見計らって、「アメリカ反帝連盟」執行委員会は、八月一五日、インディアナポリスにおいて、全国の反帝連盟の代表を集集して、反帝運動の全国大会ともいうべきリバティ・コンGRESを開催することを決定した。

ブライアンの指名受諾演説は反帝国主義者の賞讃をうけ、リバティ・コンGRESの大勢をブライアン支持へと促した。

しかし、第三党志向派はその努力を放棄していたわけではなく、このリバティ・コンGRESを彼等にとって最後のチャンスとみなし、執拗な工作を続けていた。六、七月には、ニューヨークのジョン・チャップマンがボストンを訪問して反帝運動指導者と接触していた。この時、ストーレイが最も好意的反応を示した^⑦。また同派の領袖シュルツは、八月七日エドウィン・スミスへ、「バウトウエル氏とウィンズロー氏が第三党候補案に強く反対しており」、ブライアン支持が最善であると考えていることを知っているが、なお第三党の可能性を追求するようにと、忠言していた。彼はストーレイにも同様の意向を伝え、ストーレイ自身も第三党への執着を捨てきれず動揺していた^⑧。

彼等はリバティ・コンGRESの前日八月一四日、同じインディアナポリスで、第三党のための全国大会を開いたが、参加者は一人にすぎなかった^⑨。

さて、八月一五日のリバティ・コンGRESには、黒人市民、アイルランド系市民、ドイツ系市民などを含め約三百人の代表が参加した。大会の議長はバウトウエルが務め、ストーレイが決議委員長となった。バウトウエルは開会のあいさつにおいて、フィリピン独立の重要性を強調し、合衆国の中国への干渉を非難し、義和団の乱を肯定した。そのうち、彼は、

「我々は何事かを成し遂げた。反帝諸連盟は、帝国主義の名と特徴をこの大陸の丸太小屋であれ、平原のキャンプであれ、あらゆる場所において、知られ、話されるようにした」、とこれまで反帝運動の啓発的成果を誇った。一方、二五人から成る決議委員会は長い討論の末、次のような内容の決議案を、今なお第三党に望みを託し投票権を保留した委員長ストレーを除く全員の一致で大会に報告した。^④

即ち、決議案は、「些細な国内政策問題についての見解に心を奪われることなく、マッキンレーがなしてきた事柄に不承認の刻印を押すべく、彼への投票をやめること」を有権者に勧告し、「我々は、マッキンレー氏の再選に反対するため他のいかなる方法をも歓迎する一方、帝国主義を粉砕する最も効果的な方法として、ブライアン氏を直接支持することを忠言する」、と述べていた。^⑤

さて、つづく討論では、黒人代表や、折しもフィリピンから帰還し、フィリピン戦争は「合衆国史上かつて行われた最も忌むべき犯罪」であると糾弾した兵士などを含め、多くの人々が決議案を支持した。第三党志向派も精一杯自らの方針を訴えたが、採決においては、圧倒的に決議案が承認された。さらに、黒人代表の要請により、国内の黒人市民の完全な市民的・政治的権利の実現を支持する声明を採択して、民主党とブライアンのレイシズムへの危険な傾斜に警告を与えた。リバティ・コングレスの翌日、反帝運動指導部は民主党全国委員会との協力を決定した。^⑥

我々はこのにおいて、ボストン改革者グループの多くによって早くから提唱、推進されてきた広範な国民的連合路線が、その後の反戦運動の国民的高揚を背景に、ついに、一方ではブライアンと民主党に帝国主義問題を一九〇〇年選挙の最高の争点として採用させ、他方では、運動内の上層指導者によって唱導される分裂的第三党志向を圧倒し、彼等をもひきずりつつ、民主党との連合フロントを形成したことを確認しうる。

4 統一候補ブライアン

一月の選挙に向けて開始されたキャンペーンにおいて、反帝運動は、文書・パンフレットの発行、指導者の遊説・寄稿、集会の開催などを通じ、民主党との間に直接・間接の共闘を展開した。

さて、ブライアンとの間に連合フロントを形成した反帝国主義者、とりわけその推進を担ったボストン改革者グループの多数派は、単なる政治的方便としてこの路線を採ったのではなく、その共闘の基盤をそれぞれの帝国主義理解、とりわけその「根源——被害者」認識が一致するに至ったことの中に見い出していた。早くも七月、親政府系の「ボストン・ジャーナル」紙はこの点について次のような観察をしていた。「ブライアン氏とその副官たちは、既に、フィリピンへのアメリカの干渉は独占資本家と黄金虫たち(Goldbugs)の策略であると広範に宣言している。そして、ボストン反帝連盟が無邪気にもこの考え方にその貴重な承認を与えている」と。^⑤

実際、反帝国主義者の側からもこれを確認する発言がみられた。六月、西部マサチューセッツの著名な反帝国主義者は、ブライアンは「帝国主義は主要には貪欲な商業主義の成長の所産である」とする「一般的見解」において本質的に正しいが故に、その立候補を支持すると語った。この点では、フィラデルフィア連盟の指導者ハーバート・ウェルシュも同見解であり、彼は、反帝国主義者は、「組織された、良心のない富の力」が合衆国への最大の脅威の一つであると考える点でブライアンに完全に同意しており、「我々は彼とともに、この力は帝国主義を支えているものだと考えている」と言明していた。^⑥

一方、ブライアンもキャンペーンの中で、従来よりの帝国主義理解をくりかえし表明していた。曰く、「資本家は軍国主義と帝国主義の中に利点を見るかもしれぬ。しかし、どこに、勤労者の分け前があるのだ。……彼の運命は『富める人の配当のために死ぬ』ことである」。あるいは、帝国主義は海外投資を防衛するためのみならず、国内のコモン・ピープルを威嚇するために軍国主義を必要としている、等々。^⑦

この見解にはブラッドフォードも完全に同意し、「この国の富める人々は群衆に不信を持ち、自らの防衛のため、剣を

用意しはじめている。暴力の危機は下からでなく上から来ている」、と指摘した。^⑧

反帝国主義者、なかんずくポストン改革者グループ多数派とブライアン派から成る連合フロントにとつて、今次大統領選挙は、F・B・サンボーンが集約的に述べたように、「百万長者、鉄道、銀行家、鉄工所、砂糖トラスト、スタンダード石油タンク、炭鉱、汽船シンジケート、新聞所有者などの、集積された、悪性の、防壁をめぐらせた資本の、国内の貧困層、中産層、海外の弱小民族に対する戦いである」、と映っていたのである。

しかし、我々は、ここに至っても、右の発言からも判断されるように、ブライアンの帝国主義理解が、そしてポストン改革者グループのそれが、従つて連合フロントのそれが、大枠においては、その「国内完結性」から脱脚していない事実面に直面する。

このことはまた間接的な形、つまり、再びフィリピン人民との連帯の拒否という形で露呈された。即ち、一〇月中旬、アギナルドの代表が民主党と反帝運動指導者に接近し、もしブライアンが当選したならば、ただちにアギナルドの名でフィリピン国民は戦争停止を声明するとの申し出を行った。民主党指導部は「反逆」の指弾をうけることを恐れ、代表と関りをもつことを拒否した。反帝運動指導者も交渉を退け、会長バウトウェルが投票の数日前に、ブライアン当選のあかつきには、フィリピン人は直ちに戦闘を停止するであろうと示唆するにとどまった。^⑨このことは、反帝運動が依然としてコンフォーミティの強迫に対し弱点を有していたことを語るにとどまらず、むしろ、その基本的関心方向そのものあり方——「内向性」あるいは「国内完結性」——を間接的に示すものであったとも言えよう。

さて、キャンペーンは進行していったが、連合フロントの側には様々な問題があった。運動内の第三党志向派のシュルツやストーレイも最終的にはブライアン支持に廻つたものの、それはきわめて消極的なものであった。^⑩また期待された労働者の結集もゴンパーズの中立的立場に影響されて十分果されなかった。しかし、一方では、ポストンのアイルランド系労働者のようにマックネイルらに指導されて積極的にブライアンの支持活動をするものもあった。^⑪また、黒人の参加につ

いても、民主党やブライアンが南部民主党への配慮から、白人レイシズムに曖昧な態度をとり、この点でのホーアらの攻撃に十分対応できなかったことなどから、不満足な状況にあった。^④ また一つの興味ある事実は、社会民主党員の一部がこのキャンペーンの問題は「独占対人民である。帝國主義は外国の地にその牙をむいている独占そのものにすぎぬ」との位置付けから、ブライアン支持を表明したことであつた。^⑤

また、ブライアンは帝國主義問題を最高の争点としたものの、キャンペーンが進行するにつれ、東部ではトラスト、帝國主義、労働問題の順で強調し、銀貨自由鑄造は落し、また中西部では労働・トラスト問題、南部では銀貨自由鑄造を強調した。とりわけ最終盤ではトラスト問題の比重が高められた。^⑥ しかし、彼の「独占——国内人民」矛盾認識の枠内では、この強調点の自在な転換にも何ら論理的矛盾はなかつたことは言うまでもない。

さて、早々にブライアンを拒絶し、反帝運動の大勢から孤絶していたホーアは七月よりマッキンレー再選キャンペーンを開始し、ブライアンと民主党のレイシズムと、その反帝國主義の不徹底さを批判していた。また、連合フロントが示していた、帝國主義の根源は独占であるとの認識に対しては、組織された富は国にとって脅威ではない、としてこれを退けた。^⑦

5 選挙結果

選挙の結果はマッキンレーの勝利であつた。一般投票では約七二〇万対六三〇万、選挙人獲得数では二九二対一五五であつた。たしかに両者の差は一八九六年より開いた。マッキンレーはとくに中西部で進出した。しかし、一方、ブライアンも東部において伸びた。とりわけマサチューセッツにおいては、両者の差は一八九六年の十七万八千票から一九〇年の八万票へと縮まった。なかでも、ボストンでは一八九六年にはマッキンレーが八千票差でおさえたのに対し、今回は逆にブライアンがマッキンレーに一万八千票差をつけた。この伸張にはボストンを中心に展開された反帝運動が大いに寄与したことは疑いない。^⑧

「ハートフォード・タイムズ」紙は、反帝国主義者はマサチューセッツにおける自らの成果を誇りうる、としてその健康を讃えた。^⑥

ここに、反帝運動はその第Ⅲ期、従ってそのクライマックスを終えた。この期、政治路線の選択というきわめてリアルな課題に直面する中で、反帝運動内に、これまででは潜伏していた分派が顕現した。この中で、運動論においては広範な国民連合路線を志向し、その帝国主義理解においては「国内完結性」の弱点を持ちつつも、「独占——国内人民」矛盾を認識の軸にすえたブラッドフォード・マックネイル派がボストン改革者グループの多数派を占めるに至り、運動論においては超党派連合に消極的であり、帝国主義理解においては根源を認識しえぬ「内向性」論理しか持ち合わせぬシュルツ、ストーレイらの分裂的第三党志向派を圧倒し、彼等をも、両派にとって大枠の論理である「内向性」でもって包摂しつつ、ひきずりこみ、ついに、その帝国主義理解において、そこに近似性あるいは一致を見い出すに至っていたブライアン派との間に連合フロントを形成したのであった。まさしく、一九〇〇年選挙こそは、反帝運動、とりわけボストン改革者グループ多数派にとってそのクライマックスではあった。

- ① Schirmer, *op. cit.*, p. 78, 188.
- ② *Ibid.*, p. 18, Lanzar, *op. cit.*, p. 35, Tompkins, *op. cit.*, pp. 215-216.
- ③ Schirmer, *op. cit.*, p. 180.
- ④ *Ibid.*, p. 182, Coletta, *op. cit.*, p. 241.
- ⑤ Schirmer, *op. cit.*, p. 192, Tompkins, *op. cit.*, p. 218.
- ⑥ Beisner, *op. cit.*, chap. II, Tompkins, *op. cit.*, p. 114, 183, 211-212, 215.
- ⑦ *Ibid.*, pp. 216-218, Takagi, *op. cit.*, pp. 96-97, Harrington, *op. cit.*, p. 226. この全編に「マサチューセッツの反帝出陣」の題名を掲げた。この「反帝出陣」の「反帝」は「反帝」の意である。
- ⑧ Tompkins, *op. cit.*, p. 219, Welch, *op. cit.*, p. 274, Schirmer, *op. cit.*, p. 191.
- ⑨ Tompkins, *op. cit.*, p. 221.
- ⑩ *Ibid.*, p. 222, Schirmer, *op. cit.*, p. 192.
- ⑪ Tompkins, *op. cit.*, p. 224-225.
- ⑫ Schirmer, *op. cit.*, p. 188.
- ⑬ Coletta, *op. cit.*, pp. 238-241.
- ⑭ Schirmer, *op. cit.*, pp. 192-193.
- ⑮ マサチューセッツの「反帝出陣」の「反帝」は「反帝」の意である。Tompkins, *op. cit.*, p. 215, テンペルマン・シムズから「反帝出陣」の「反帝」は「反帝」の意である。Curti, *op. cit.*, p. 133.

- ⑫ Harold Baron, "Anti-Imperialism and the Democrats," *Science and Society*, vol. 21, (1957), pp. 231-232.
- ⑬ Tompkins, *op. cit.*, p. 223.
- ⑭ Coletta, *op. cit.*, pp. 253-254.
- ⑮ Kirk H. Porter and Donald B. Johnson (ed.), *National Party Platforms*, (1961), p. 124.
- ⑯ Schimmer, *op. cit.*, p. 197.
- ⑰ *Ibid.*, p. 198, Curti *op. cit.*, p. 132, 134-135.
- ⑱ Coletta, *op. cit.*, pp. 258-259, Baron, *op. cit.*, pp. 233-234.
- ⑲ Porter and Johnson, *op. cit.*, p. 113.
- ⑳ Coletta, *op. cit.*, p. 264, Schimmer, *op. cit.*, p. 200, Harrington, *op. cit.*, p. 226.
- ㉑ Bryan, *op. cit.*, p. 87.
- ㉒ *Ibid.*, p. 90.
- ㉓ Schimmer, *op. cit.*, p. 199.
- ㉔ Tompkins, *op. cit.*, p. 230.
- ㉕ Schimmer, *op. cit.*, p. 200.
- ㉖ *Ibid.*, pp. 200-201.
- ㉗ *Ibid.*, p. 201, Tompkins, *op. cit.*, pp. 231-232, Lanzar, *op. cit.*, p. 37.
- ㉘ Schimmer, *op. cit.*, pp. 201-202.
- ㉙ *Ibid.*, p. 205.
- ㉚ *Ibid.*, p. 205.
- ㉛ *Ibid.*, p. 206.
- ㉜ *Ibid.*, pp. 206-208.
- ⑫ *Ibid.*, p. 208.
- ⑬ *Ibid.*, pp. 219-220. 424' トハトハナクハヤシクソトヤク
 事トヤク事ニシテヤク事ヤク事ノミヤクシテ Coletta, *op. cit.*,
 p. 284.
- ⑭ 註トベテ Tompkins, *op. cit.*, pp. 230-234, Beisner, *op. cit.*, pp.
 130-131, Schimmer, *op. cit.*, pp. 215-216, Takagi, *op. cit.*, pp. 99-
 100 444 註。
- ⑮ Schimmer, *op. cit.*, pp. 212-213.
- ⑯ *Ibid.*, pp. 213-215. 註トベテ George P. Marks, III (comp. &
 ed.), *The Black Press Views American Imperialism* (1898-1900),
 (1971), Chap. VII, 註。
- ⑰ Schimmer, *op. cit.*, pp. 218-219.
- ⑱ Coletta, *op. cit.*, p. 272, 277, Baron, *op. cit.*, p. 235, Thomas A.
 Bailey, "Was the Presidential Election of 1900 A Mandate on
 Imperialism?" *Mississippi Valley Historical Review*, vol. 24,
 (1937), p. 50.
- ⑲ Schimmer, *op. cit.*, p. 210, Welch, *op. cit.*, pp. 268-269. 444
 K H-トトキナクハナクハトクハ事ニシテ *ibid.*, pp. 270-
 271. 444 トトキナクハトクハ事ニシテトクハ事ニシテ
 事ニシテ Beisner, *op. cit.*, p. 121, 123.
- ⑳ U. S. Dept. of Commerce, *Historical Statistics of the United
 States*, (1961), pp. 687-688, Bailey, *op. cit.*, p. 51, Schimmer, *op.
 cit.*, p. 220.
- ㉑ *Ibid.*, p. 220.

IV その後

局部的善戦はあったものの、反帝国主義運動は敗北した。反帝国主義者にとって挫折は深かった。連合フロントの唱導者ブラッドフォードは選挙直後より長期にわたる沈滞におちこんでいった。また、ウィリアム・クロフトにとっては、その衝撃は「あたかもこの国が殺戮と略奪——血と灰燼にのみり込んでいくように思われる」ほどのものであった^①。

その後、反帝運動は組織的にも、政治的力量においても急速に衰退して行く。たしかに、反帝連盟としては、その敗北を認めず、一九〇四年までの間に、フィリピンにおけるアメリカ軍の残虐行為の大々的暴露、それについての上院調査委員会の設置、キューバへのプラット修正適用反対、パナマ事件糾弾など様々の問題にとりくみつつ、興味ある軌跡を描く。しかし、それは、しよせん、「死んだ馬に鞭打っている」にすぎないのであった。組織的には、一九〇〇年以後、シカゴ、ニューヨーク、フィラデルフィアなどの連盟が消滅し、唯一残った「ニューイングランド連盟」は、一九〇四年、「反帝国主義連盟」を再称するに至る。弱体化しつつある組織の中でも、シュルツ、ストーレイ、チャールズ・アダムズ等の保守的上層指導者が、フィリピンへのより穏和な政策を政府に要求するといったきわめて一面的で微温的運動を細々と継続するにすぎぬ^②。一方、連合路線派であったブラッドフォード、バウトウェル、サンボーンなどの影響力は薄れていた^③。

反帝連盟は一九〇四年大統領選において民主党候補パーカーを支持する。しかし、反帝国主義者あるいはブライアン支持者の多くは、ストーレイの考えたように、セオドア・ローズヴェルト支持へ流れていったことが推測される。そのことは、例えば、マサチューセッツにおいては、ローズヴェルトが大勝し、知事選では強い反帝国主義の立場をとる民主党候補が勝利したことからも傍証されよう^③。

反帝運動を担い、それに関った人々の関心がローズヴェルトに傾斜しつつあったことについては様々な理由があげられ

よう。しかし、我々は、この傾斜を基礎付ける論理的必然性が、実は、盛期反帝運動の中に内在していたことを知っている。

一九〇三年、反帝國主義者のロバート・ビスビー師は次のような発言を行っている。

「フィリピンの問題は副次的な問題である。それは非常に根深い病弊の単なる前兆にすぎぬ。パナマ問題も同じことだ。我々は国内に問題をもっているのである。我々の時代は、原基的で真正な民主主義が圧倒的な金権権力に対して生死をかけて闘っている時代である。」「この連盟の視野を拡げて、それを真正な民主主義の利益のための、巨大で、一般的で、根深い運動にすべきである。」「と。この発言の中には、反帝運動に内在する帝國主義理解の「内向性」、そのうちでもとりわけ「国内完結性」が結晶化された形で表白されている。たしかに、一九〇二年ローズヴェルトによるフィピン戦争終結宣言、あるいは、体制側によるいわゆる「新植民地主義」の採用は、このような認識を純粹の国内論理として展開させる状況を許した。しかし、それ以上に、ローズヴェルトに体现される革新主義の進行は、彼の「トラスト狩り」にみられるように、帝國主義の根源である独占とその被害者である国内人民の間の矛盾を直接につくもののようにみえた。ここに反帝國主義者がローズヴェルトに吸引されていた主因があろう。いずれにせよ、反帝運動は革新主義へ向うことを許され、その基底的部分はそれに吸引されていた。しかしながら、帝國主義の「根源」主敵「トラスト」認識の弱い部分、即ち、帝國主義理解の「内向性」にのみとどまっている上層部分——かつての第三党派派など——は、それが故に、国内において明確な改革運動を組みえず、依然として、きわめて抽象的で狭小な「反帝運動」にしがみつくことになる。^⑤

① Schirmer, *op. cit.*, p. 241 n, Curti, *op. cit.*, p. 133.

② チャールズ・アダムスは、反帝運動と絶縁したわけではなく、その

後も、フィピン戦争停止、彼地への介入削減等を要求する提案に名前を貸すなどしていた。この点については、Beisner, *op. cit.*, p. 120.

③ Schirmer, *op. cit.*, p. 252.

④ Tompkins, *op. cit.*, p. 259.

⑤ 反帝連盟は名目的には一九二〇年まで存続する。

一八九八年六月、ボストン改革者グループを核として発足した反帝国主義運動は、その組織方針どおり、きわめて多様かつ広範な国民諸階層を結集した運動へと飛翔した。しかし、この運動は、一見、その参加者において多様、その過程において平板に見えながらも、実は、その中に、それと識別しうる基本的諸グループと、状況の提起する課題にみあった、運動内容の時期的変動を有していた。

第一期…海外領土(とりわけフィリピン)併合が提起される中で、反帝運動は明確にその拒否をもって応えた。これは対案的フィリピン措置策を欠落させていたが故に、いわば、フィリピン「突き放し」策ともいえた。彼等はこの課題を連邦議会内闘争という狭小な枠の中で達成せんとした。一方、この対応を基底に於て支えたものは彼等の帝国主義理解であった。彼等は帝国主義の現象形態を海外領土の政治的支配として捉えた。この捉え方は、反帝運動の全期間、全階層を通じてほぼ不変であると断言しうる。また、帝国主義の本質(根源——被害者)については、ブラッドフォード・マックネイル派、即ちボストン改革者グループのラディカルな部分はおぼろげながらも「独占——国内人民」矛盾として感知したが、運動全体としてのコンセンサスは、むしろ根源認識を欠き、被害は国内にあるとする点を強調するものであった。これは帝国主義理解の「内向性」とも呼びうるものであった。

第二期…条約批准成立、フィリピン戦争勃発という状況の中で、反帝運動は反戦運動、フィリピン独立賦与誓約獲得運動へと転回した。しかし、運動はコンフォミティの強迫の中で、フィリピン人民との連帯の限界を露呈した。ブラッドフォードなどボストン改革者グループのラディカルな部分はある程度克服したものの、それとてもやはり精神的連帯にとどまった。実は、コンフォミティをめぐる動揺も、帝国主義理解の「内向性」に根ざしていたといえよう。この期、反帝運動の帝国主義理解は第一期のそれをでるものではなかった。しかし、海外戦争の衝撃の中で、ボストン改革者

グループ内ブラッドフォード・マックネイル派の「独占——国内人民」矛盾認識が徐々に浮上しつつあった。

第三期・帝國主義勢力の打倒を目ざす政治戦の時期であった。いわば、これは二年間にわたる運動の総決算の場であった。ここに至って、反帝運動内の諸グループが顕在化した。

さて、ここに生じた諸グループをどのように整理し規定すべきであろうか。パウトウェルが一九〇二年に述べたように、反帝運動全体は労働者の結集を十分なしえず、ついにプチ・ブル的構成を脱しきれなかった^①。しかし、その中にあって、ブライアンとの連合路線派は、帝國主義理解の中軸に「独占——国内人民」矛盾認識をもち、その運動方針として広範な国民連合フロントを志向するグループであり、ブラッドフォード、マックネイル、ウインスロー、サンボーンなどに代表され、徐々にボストン改革者グループの中で多数派を形成するに至る。一方、第三党志向派はシュルツ、ストーレイ等のより上層部分によって指導され、その帝國主義理解は、国内諸原則や制度への打撃を主悪として捉えるきわめて抽象的なものであり、帝國主義の「根源——主敵」についての認識を欠落させており、その運動方針は、相互の相違に固執し、広範な戦線の結成に消極性をもつものであった。彼等がブライアンに反対した理由は、彼の銀貨自由鑄造などの経済政策への嫌悪の故であったが、前述したように、ブライアンにとって、銀貨自由鑄造とは、「独占——国内人民」矛盾の一つの表象であった。この矛盾認識の有無こそが両者を分った。第三党志向派にはそれが全く欠落していた。ここに両者の不和の因がある。また共和党内の改革を唱えたホーアに至っては、マッキンレーを結局は支持し、組織された富は国にとって脅威ではないと明言したことから判断されるように、「独占——国内人民」矛盾を全面的に否定していた。しかも彼は、広範な国民の結集した力を信じぬ個人主義的「改革者」であった。第三党派、ホーアともに社会の矛盾を捉える認識軸——この時代にあつては「独占——人民」矛盾認識——を欠いていた。その意味で、レーニンのいう「ブルジョア民主主義の最後のモヒカン族」とは、彼等にこそふさわしい呼称ではあつた。

さて、このような諸グループの主張する諸路線の中で、ボストン改革者グループ多数派の主張するブライアンとの連合

路線が、上層指導者の唱導する第三党路線、あるいは共和党内部改革路線を圧倒し、ついに、ブライアンとの連合フロントの結成に成功する。このフロントは単なる政治的方便の産物であったのではなく、両者に共通する帝国主義理解に基礎付けられていた。即ち、ブライアンこそはきわめてエモーショナルなものではあるが、帝国主義の本質を「独占——国内人民」矛盾の一表象とする認識のチャンピオンであり、そしてまたこの認識をボストン改革者グループ多数派も獲得するに至っていた。しかし、この認識もまた帝国主義理解の「内向性」の枠内に含まれ、その中でもむしろ、「国内完結的」帝国主義理解とよびうる質のものであった。それ故、反帝運動とフィリピン人民との連帯は依然として精神的なそれにとまった。

一九〇〇年以後、この「国内完結的」帝国主義理解に依拠した反帝国主義者は、フィリピン人民の服従化の進行、「新植民地主義」の採用、そして、なかならず、革新主義の興起の中で、自らの論理の命ずるところに従い、革新主義へと合流して行く。ここに、反帝運動の基部はその顕著な表象を失い、運動は「衰退」して行く。一方、「内向的」帝国主義理解にのみ留まっている部分はとり残され、形骸化した「反帝運動」に固執する。ただし、反帝運動（とりわけ基部）は帝国主義と独占の関連を認識しえなかったが故に衰退して行ったのではなく、まさに、その関連を主に国内人民との関りにおいて認識していたが故にこそ「消滅」していったのである。その意味で、極言すれば、反帝国主義運動とは、外交論争の形をとった一つの国内改革運動、あるいは国内抗議運動であったともいえよう。

① 「共和国救済のための決定的努力は、労働し、生産する階級によつてなされるべきである。」Schirmer, *op. cit.*, p. 288.

（京都大学文学部研修員）

ments of Quyildar, a great nomadic soldier. The rites were conducted according to the manner which was generally found among the peoples in the Siberian forests. The funeral rituals were based on the belief of resurrection; thus the bones were preserved and enshrined on a tree. Therefore the description of this event provides the basis for presuming that the forest peoples had a great influence on man's outlook of the world as presented in the historical narrations of the Secret History.

The Anti-Imperialist Movement in the United States 1898—1904
— Groups and their Understanding of Imperialism —

by

R. Yokoyama

In this article, I will try to grasp the reality and define the character of the Anti-Imperialist Movement in the United States from the end of 19th. century to the dawn of 20th. century by tracing it as a social movement.

To realize the above design, I will apply some approaches as follows; first, to include various popular movements outside the Anti-Imperialist League as objects; second, to classify the persons concerned into some groups according to their respective understanding of imperialism; third, to divide its term of activities into some periods.

Consequently, I will conclude that, in the movement, there existed a predominant group that perceived the inseparable combination between monopoly and imperialism. As a whole, however, the movement was concerned primarily with the domestic problems (so to speak, "inward movement"), so it was destined to flow into the Progressivism.